

東京藝術大学

| 大学案内 | 2 0 1 5 |



東京藝術大学

大学案内 2015

目次

学長挨拶	2
東京藝術大学の使命と目標	3
アドミッションポリシー	4
沿革	6
組織・教員	8
美術学部	10
音楽学部	14
大学院 美術研究科	18
大学院 音楽研究科	20
大学院 映像研究科	22
キャンパス	24
組織・施設	26
学生生活	30
資格取得・進路	32
国際交流	33
入試情報	34
お問い合わせ	36

東京藝術大学

| 大学案内 | 2 0 1 5 |

学長挨拶

東京藝術大学は、我が国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我が国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことを基本目標とし、芸術に関する教育研究の最高水準を維持し続けています。この125年以上続く、誇りある伝統を振り返るにつけ、歴任教職員、ならびに同窓生の並々ならぬ努力、各界の皆様方の御尽力に深甚なる敬意と心からの感謝を捧げたいと存じます。

今年は東京藝術大学として、大きな話題が2つあります。一つは学生寮「藝心寮」の完成です。足立区東和に完成した「藝心寮」は、9階建て、総戸数300戸で、アトリエや音楽練習室も備わり、本学の学生にとっては非常に設備の充実した寮となっています。また、近隣大学の学生も入寮可としていることも大きな特徴です。地元足立区からも大きな期待を寄せられている藝心寮から、今後世界的な芸術家が生まれることを期待しています。

もう一つは、音楽学部4号館、第6ホールの竣工です。長らく改修工事中であった第6ホールが完成し、4月に竣工記念式典を行うことができました。このホールの改修にあたっては、教職員が何度も議論を重ね、その結果、最高の空間を作り上げることができました。なお、このホールが竣工の日を迎えることができたのは、本学に対して多額のご寄附をいただいたおかげであり、寄附者の方には、この場を借りて御礼申し上げます。今後、学生・教員にとっても、さらには観客の皆様からも愛されるホールとなることを確信しています。

今年度の入学式において、私は新入生に対して、殷や周の時代に青銅器に鑄込まれた金文の、「信」という文字を揮毫しました。

この文字は、「人」と「言」からなり、人の言葉が心と一致し、信じることにより心が繋がり、大きな絆となるという意味です。目標や信念を心の中に秘め、有意義な学生生活を過ごすしてもらいたい。「信」という言葉を心の軸にして、これからの学生生活を過ごすことによって、より魅力的な芸術家に成長し、自信を持って、社会に旅立ってほしいという意味を込めました。

東京藝術大学は、これからも芸術系大学及び社会との連携・協力を通して、また、世界の国々と国を超えて協力し、次世代の優れた芸術家を育成し、世界の芸術の発展に貢献していくよう、今後ますます邁進し続けて参ります。

東京藝術大学学長 **宮田 亮平**



宮田 亮平(みやた・りょうへい)

金工作家

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻(鍛金)修了

イルカをモチーフとした「シュプリングエン」シリーズなどの作品で、「宮田亮平金工展」(個展)をはじめとして、国内外で多数の展覧会に参加。「日本現代工芸美術展」大賞・文部大臣賞・内閣総理大臣賞や、「日展」内閣総理大臣賞、日本芸術院賞など数々の賞を受賞。

美術学部長を経て、平成16年4月から理事及び副学長。平成17年12月から現職。

東京藝術大学の 使命と目標

東京藝術大学は、その前身である東京美術学校、東京音楽学校の創立以来120余年間、我国の芸術教育研究の中核として、日本文化の伝統とその遺産を守りつつ、西欧の芸術思想及び技術を摂取、融合を図り幾多の優れた芸術家、中等教育から高等教育に亘る芸術分野の教育者・研究者を輩出してきました。

こうした歴史的経緯を踏まえ、我国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことが、東京藝術大学の使命であると考えています。

また、この使命の遂行のため、下記のことを基本的な目標としています。

- ・世界最高水準の芸術教育を行い、高い専門性と豊かな人間性を有した芸術家、芸術分野の教育者・研究者を養成する。
- ・国内外の芸術教育研究機関や他分野との交流等を行いながら、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進する。
- ・心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、市民が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献する。

アドミッションポリシー

美術学部

Faculty of Fine Arts

美術学部では、125年を超える歴史のなかで、美術の各分野において、時代を代表する作家、研究者、教育者を輩出してきました。

本学部は、こうした伝統のなかで培われた創造性を身につけ、新たな時代に対応し、優れたオリジナリティを発揮できる人材の育成を目的としています。本学部で学ぶ学生には、歴史のなかで蓄積された技芸と知識を修得し、さらにその成果を革新し、発展させ、広く世界の文化と社会のために貢献する能力が望まれます。

こうした理念を踏まえ、真摯な姿勢で、教員とともに研鑽を積み、美術の世界に、豊かな収穫をもたらす学生を広く求めています。

音楽学部

Faculty of Music

音楽学部は、音楽についての深い学識と高い技術を授け、音楽の各分野における創造、表現、研究に必要な優れた能力を養い、社会的要請に応える人材の育成を目指しています。

この教育理念に基づき、本学部からは、百年以上に亘り世界的な音楽家や広く社会の文化発展に寄与した多くの人材を輩出してきました。

こうした伝統と遺産を継承しつつ、新たな歴史を刻み込む強い意志と意欲を持った方を求めています。

具体的に本学部各科が求める学生像は次のとおりです。

作曲科

優れた音楽的能力のみならず、伝統的な語法に関する確かな素養を身につけ、且つ自発性、創造性を有する人材

声楽科

優れた声楽家になる可能性を持ち、智と人間性に優れた人材

器楽科 ピアノ

優れたピアノ演奏技術と芸術的感性のみならず、音楽全般に対して幅広い関心を持っている人材

器楽科 オルガン

確かな目的意識と意欲を持ち自分の才能をのばす熱意と忍耐力を持ち、音楽とオルガンに喜びを持って取り組む人材

器楽科 弦楽

優れた基礎能力のみならず音楽表現に対する積極性を兼ね備えている人材

器楽科 管打楽

演奏家として、人間と音楽に関きを感じ持っている人材

器楽科 古楽

専攻する楽器の構造と歴史に深い関心を持ち、喜びと熱意を持って演奏表現に取り組む将来性ある人材

指揮科

優れたソルフェージュ力や豊かで説得力に富んだ音楽性を持ち、音楽的、芸術的に優れたリーダーシップを兼ね備えた人材

邦楽科

専攻分野のみならず専攻以外の音楽にも幅広く研究を重ね、技術・人格共に優れた演奏家となるべく努力する人材

楽理科

幅広い資料を検証する語学能力、独自の視点・問題点を発見する独創力、批判的に歴史・社会・文化を考察する思考力と論理性、様々な音楽に感動する柔軟な心を備え、将来何らかの形で音楽研究・実践・教育に携わる志を持つ人材

音楽環境創造科

従来の枠をこえた観点で音楽芸術の創造をめざし、音楽・文化・社会の関わりについて強い関心を持ち、音楽を中心とした新しい文化環境創造を志す人材

大学院美術研究科

Graduate School of Fine Arts

大学院美術研究科では、これまで美術の各分野において、時代を代表する作家、研究者、教育者を輩出してきました。

本研究科は、こうした伝統のなかで培われた創造性を身につけ、新たな時代に対応し、優れたオリジナリティを発揮し、指導的な立場に立つ人材の育成を目的としています。本研究科で学ぶ学生には、歴史のなかで蓄積された技芸と知識を修得し、さらにその成果を革新し、発展させ、広く世界の文化と社会のために貢献する能力が望まれます。

こうした理念を踏まえ、自立した姿勢で研鑽を積み、国際的な見地から美術の世界に、豊かな収穫をもたらす学生を広く求めています。

大学院音楽研究科

Graduate School of Music

大学院音楽研究科は、高度に専門的かつ広範な視野に立ち、音楽についての深遠な学識と技術を授けること、音楽に関わる各分野における創造、表現、研究又は音楽に関する職業等に必要な優れた能力を養うこと、さらには自立して創作、研究活動を行うに必要な高い能力を備えた教育研究者の養成を目的としています。

この教育理念に基づき、本研究科は、音楽に関しての豊富な知見、高度の技術と卓越した研究能力を持ち、なおかつ、幅広い視野や興味・関心、柔軟な感性、独創的な構想力、論理的な思考力、強い意志を持っている人材を求めています。

大学院映像研究科

Graduate School of Film and New Media

大学院映像研究科は、映像に関する学術的な理論及び実践を教授研究し、自立して研究活動と創作活動を行う必要とされる独創性と同時代性を備えた芸術家と教育研究者を養成することを目的としています。

この理念を踏まえ、本研究科では真摯な態度で制作や研究に励むことのできる学生を求めています。

沿革

東京芸術大学は、国立学校設置法（昭和24年法律第150号）の公布施行により、東京美術学校（現在の美術学部）、東京音楽学校（現在の音楽学部）を包括して、昭和24年5月に設置され、美術学部（絵画科、彫刻科、工芸科、建築科、芸術学科）、音楽学部（作曲科、声楽科、器楽科、指揮科、楽理科）の2学部10学科と附属図書館が置かれました。

その後何度かにわたって学部の拡充改組が行われ、現在は美術学部（絵画科・彫刻科・工芸科・デザイン科・建築科・先端芸術表現科・芸術学科）、音楽学部（作曲科・声楽科・器楽科・指揮科・邦楽科・楽理科・音楽環境創造科）の2学部14学科と、附属図書館、大学美術館、演奏芸術センター等の施設で構成されています。

大学院は、美術研究科・音楽研究科・映像研究科の3研究科が設置されています。

また、音楽学部附属する教育・研究施設として附属音楽高等学校が設置されています。

※ 本学設置の沿革を概略すると、右のとおりです。
また、本学の母体であった東京美術学校、東京音楽学校の沿革は、次ページのとおりです。

概略

昭和24年5月	東京芸術大学 創立
昭和25年4月	音楽学部附属邦楽科を設置
昭和26年4月	大学別科（音楽）を設置
昭和27年3月	国立学校設置法の改正により、東京美術学校、東京音楽学校を廃止
昭和29年4月	美術専攻科及び音楽専攻科（1年制）を設置
昭和29年4月	音楽学部附属音楽高等学校を千代田区神田駿河台に設置
昭和34年4月	美術専攻科及び音楽専攻科とも2年制となる
昭和35年9月	美術学部附属奈良研究室を開設
昭和38年4月	大学院美術研究科、音楽研究科（修士課程）を設置
昭和40年4月	美術学部附属古美術研究施設を奈良市に設置
昭和45年4月	芸術資料館を設置
昭和48年4月	保健管理センターを設置
昭和50年4月	美術学部工芸科を改組し、工芸科とデザイン科を設置
	言語・音声トレーニングセンターを設置
昭和51年5月	美術学部附属写真センターを設置
昭和52年4月	大学院美術研究科、音楽研究科に博士後期課程を設置
昭和57年8月	那須高原研修施設を設置
昭和62年3月	取手校地を取得（茨城県取手市）
昭和63年4月	留学生センターを大学の内部組織として設置
平成3年10月	取手校地を開設
平成5年7月	取手校地短期宿泊施設を設置
平成6年8月	取手校地に芸術資料館取手館が竣工
平成7年4月	大学院美術研究科（修士課程、博士後期課程）に、独立専攻として文化財保存学専攻を設置
	音楽学部附属音楽高等学校を上野校地に移転
平成8年3月	国際交流会館を松戸市に設置
平成9年4月	演奏芸術センターを設置
平成10年4月	大学美術館を設置（芸術資料館の転換）
	奏楽堂開館
平成11年4月	美術学部の既設学科を改組し、先端芸術表現科を取手校地に設置
平成11年10月	大学美術館開館
平成12年4月	情報処理センター（芸術情報センター）を設置
平成13年4月	副学長の設置
	事務局・学生部事務一元化
平成14年4月	音楽学部の新学科として、音楽環境創造科を取手校地に設置
	取手校地に附属図書館取手分室を設置
平成15年4月	大学院美術研究科先端芸術表現専攻を設置
平成16年4月	国立大学法人東京芸術大学となる
平成17年4月	横浜校地を開設
	大学院映像研究科（修士課程）映画専攻を設置
平成18年4月	大学院映像研究科（修士課程）にメディア映像専攻を設置
	大学院音楽研究科（修士課程）音楽学専攻を改組し、音楽文化学専攻を設置
平成18年9月	千住校地を開設
	音楽学部音楽環境創造科を千住校地に移転
平成19年4月	大学院映像研究科に博士後期課程（映像メディア学専攻）を設置
	社会連携センターを設置
平成20年4月	大学院映像研究科（修士課程）にアニメーション専攻を設置

東京美術学校 沿革

明治17年7月、文部省専門・普通両学務局に
図画教育改良を目的とする図画調査会が置かれ、調査の結果、官立美術学校を設立することに決定しました。翌18年12月、文部省学務一局に図画取調掛がおかれ、アーネスト・フェノロサ、岡倉覚三、狩野芳崖、狩野友信
その他が委員となって設立の準備を始めました。同掛は明治19年2月に事務所を小石川植物園内に移し、岡倉覚三がその主幹となりました。同年9月に文部省は宮内省と協議の上、文部省参事官浜尾新を委員長とし、フェノロサ、岡倉を委員として欧米の美術及び美術教育視察を行わせ、翌20年10月に図画取調掛は東京美術学校と改称し、校則を定め、同年12月に教育博物館跡（現在地）に移転しました。

明治22年2月、わが国固有美術の振作発揚を旨とする5年制の学校として、当初は普通科（2年）、専修科（3年）、特別の課程（1年）を置き、授業を開始しました。普通科では実技は絵画・造形を兼習し、専修科では絵画（日本画）、彫刻（木彫）、美術工芸（金工・漆工）の三科に分れ、普通図画教員志望者は、普通科修了後、特別の課程を履修することとしました。その後、明治25年に鑄金科を、明治28年に鍛金科を、翌29年に西洋画科（昭和8年油画科と改称）及び図案科を、明治32年に塑造科を、明治40年に図画師範科（3年制）を、大正3年に製版科（3年制、大正12年廃止）を、翌4年に臨時写真科（3年制、大正15年廃止）を、大正12年に建築科を設置、昭和21年には、それまで男子のみの学校であったが、女子の入学が許可されるようになったのをはじめとして幾度か制度その他の改革を経て、昭和27年3月廃校となりました。

当時は年限1年の予科、年限3～6年の本科（絵画科、彫刻科、工芸科、建築科）と師範科、年限2年の研究科からなる専門学校でした。

東京音楽学校 沿革

明治12年10月、文部省に我が国の音楽教育を実施するにあたっての諸事項を調査するため、音楽取調掛を設置し、御用掛に初代の東京音楽学校校長となった伊澤修二が任命されました。翌13年3月、本郷の文部省用地に取調官署が置かれ、内外音楽の調査をはじめ多くの事業を開始するとともに、東京師範学校及び東京女子師範学校の附属小学校、幼稚園生徒に授業を行い、また、取調掛にも伝習人を募集して音楽の授業と教員の養成を始めました。

明治15年9月以降は、諸外国の音楽学校の制度を調査した上、4年制の音楽専門教育の学制を施行し、取調掛は単に音楽研究の施設であったばかりでなく、我が国最初の近代的な音楽教育機関として成長しました。

音楽取調掛は、その後、明治18年2月には音楽取調所、同年12月に再び音楽取調掛となり、明治20年10月に東京音楽学校と改称し、明治23年5月西四軒寺跡（現在地）に移転しました。

明治26年から一時、東京高等師範学校の附属学校となりましたが、同32年4月には再び独立し、昭和11年6月邦楽科が設置されたのをはじめとして幾度か制度その他の改革を経て、昭和27年3月廃校となりました。当時は、4年制の本科（声楽科、器楽科（ピアノ、オルガン、弦楽器、管楽器、打楽器）、作曲科及び邦楽科（能楽、箏曲、長唄）と、4年制の師範科、2年制の研究科（声楽部、器楽部、作曲部、邦楽部）並びに簡易な技能教育を目的とした選科（1～5年以内）からなる専門学校でした。

東京音楽学校



組織・教員

東京藝術大学

学長

宮田 亮平

理事(教育担当)

渡邊 健二

理事(研究担当)

北郷 悟

副学長(教育担当)

越川 倫明

副学長(研究担当)

松下 功

理事(総務・財務・施設担当)

事務局長

馬場 剛

美術学部長

美術研究科長

保科 豊巳

音楽学部長

音楽研究科長

澤 和樹

映像研究科長

岡本 美津子

附属図書館長

大角 欣矢

大学美術館長

関 出

社会連携センター長

宮廻 正明

言語・音声トレーニングセンター長

杉本 和寛

演奏芸術センター長

山本 正治

芸術情報センター長

藤幡 正樹

藝大アートプラザ所長

木津 文哉

保健管理センター長

須甲 松信

留学生センター長

三田村 有純

学部

美術学部

240名

絵画科

80名

日本画専攻

(25名)

油画専攻

(55名)

彫刻科

20名

工芸科

30名

デザイン科

45名

建築科

15名

先端芸術表現科

30名

芸術学科

20名

附属古美術研究施設

附属写真センター

音楽学部

237名

作曲科

15名

声楽科

54名

器楽科

98名

指揮科

2名

邦楽科

25名

楽理科

23名

音楽環境創造科

20名

大学別科

30名

附属音楽高等学校

40名

大学院

美術研究科

修士課程 199名

博士後期課程 35名

修士

絵画専攻

47名

彫刻専攻

15名

工芸専攻

28名

デザイン専攻

30名

建築専攻

16名

先端芸術表現専攻

24名

芸術学専攻

21名

文化財保存学専攻

18名

博士後期

美術専攻

25名

文化財保存学専攻

10名

音楽研究科

修士課程 119名

博士後期課程 25名

修士

作曲専攻

7名

声楽専攻

20名

器楽専攻

45名

指揮専攻

3名

邦楽専攻

9名

音楽文化学専攻

35名

博士後期

音楽専攻

25名

映像研究科

修士課程 64名

博士後期課程 3名

修士

映画専攻

32名

メディア映像専攻

16名

アニメーション専攻

16名

博士後期

映像メディア学専攻

3名

附属図書館
大学美術館
社会連携センター
言語・音声トレーニングセンター
演奏芸術センター
芸術情報センター
藝大アートプラザ
保健管理センター
留学生センター
事務局

注1) 数字は入学定員。

2) 美術学部先端芸術表現科では、帰国子女入試を実施しています。詳細については、平成26年7月発行の「平成27年度東京芸術大学入学選抜要項」を参照してください。

美術学部・大学院 美術研究科

■ 絵画科・日本画専攻

日本画

齋藤 典彦

教授

植田 一穂

准教授

関 出

教授

梅原 幸雄

教授

手塚 雄二

教授

吉村 誠司

准教授

喜多 祥泰

助教

■ 絵画科・油画専攻

油 画

小林 正人

准教授

小山 穂太郎

教授

坂口 寛敏

教授

保科 豊巳

教授

坂田 哲也

教授

O JUN

准教授

版 画

東谷 武美

教授

壁 画

三井田 盛一郎

准教授

中村 政人

准教授

工藤 晴也

教授

油画技法・材料

秋本 貴透

准教授

齋藤 芽生

准教授

寺内 誠

助教

■ 彫刻科

彫 刻

木戸 修

教授

林 武史

教授

大巻 伸嗣

准教授

深井 隆

教授

原 真一

准教授

北郷 悟

教授(兼)

森 淳一

准教授

山口 桂志郎

助教

■ 工芸科

彫 金

飯野 一朗

教授

前田 宏智

准教授

鍛 金

篠原 行雄

教授

丸山 智巳

准教授

鋳 金

橋本 明夫

教授

赤沼 潔

教授

漆 芸

三田村 有純

教授

小椋 範彦

准教授

陶 芸

島田 文雄

教授

豊福 誠

教授

染 織

菅野 健一

教授

上原 利丸

准教授

木工芸

園部 秀徳

講師

ガラス造形

藤原 信幸

准教授

工芸基礎

三神 慎一朗

助教

■ デザイン科

視覚・演出

河北 秀也

教授

機能・演出

尾登 誠一

教授

映像・画像

箕浦 昇一

教授

環境・設計

清水 泰博

教授

視覚・伝達

松下 計

教授

機能・設計

長濱 雅彦

准教授

企画・理論

藤崎 圭一郎

准教授

空間・設計

橋本 和幸

准教授

描画・装飾

押元 一敏

准教授

空間・演出

鈴木 太朗

准教授

小野 哲也

助教

■ 建築科

建築設計	乾 久美子	准教授
	中山 英之	准教授
	トム、ヘネガン	教授
環境設計	北川原 温	教授
	ヨコミソ マコト	准教授
構造計画	金田 充弘	准教授
建築理論	光井 渉	教授
	野口 昌夫	教授
	橋本 圭央	助教

■ 先端芸術表現科

先端芸術表現	伊藤 俊治	教授
	たほ りつこ	教授
	佐藤 時啓	教授
	長谷部 浩	教授
	日比野 克彦	教授
	古川 聖	教授
	鈴木 理策	准教授
	小谷 元彦	准教授
	八谷 和彦	准教授
	小沢 剛	准教授
	柴田 悠基	助教

■ 芸術学科

美 学	松尾 大	教授
	川瀬 智之	准教授
日本・東洋美術史	佐藤 道信	教授
	松田 誠一郎	教授
	片山 まび	准教授
	須賀 みほ	准教授
西洋美術史	越川 倫明	教授
	田邊 幹之助	教授
	佐藤 直樹	准教授
	金子 智太郎	助教
美術教育	本郷 寛	教授
	木津 文哉	教授
	小松 佳代子	准教授
	宮永 美知代	助教
	西山 大基	助教
美術解剖学	布施 英利	准教授

■ 文化財保存学(大学院)

保存修復	宮廻 正明	教授
	荒井 経	准教授
	島 隆康	教授
	藪内 佐斗司	教授
	辻 賢三	教授
	長尾 充	教授
保存科学	稲葉 政満	教授
	桐野 文良	教授
	塚田 全彦	准教授
システム保存学(連携)	佐野 千絵	教授
	木川 りか	教授
	中山 俊介	教授
	北野 信彦	教授
	朽津 信明	准教授
	早川 典子	准教授
	鈴木 篤	助教

■ 保健体育

体 育	高橋 亨	教授
-----	------	----

音楽学部・大学院 音楽研究科

■ 作曲科

小鍛冶 邦隆	教授
野平 一郎	教授
安良岡 章夫	教授
鈴木 純明	准教授
林 達也	准教授

■ 声楽科

川上 茂	教授
佐々木 典子	教授
福島 明也	教授
平松 英子	教授
寺谷 千枝子	教授
永井 和子	教授
勝部 太	教授
吉田 浩之	教授
菅 英三子	准教授
櫻田 亮	准教授
甲斐 栄次郎	准教授
スティーヴン・ローチ	招聘教授
直井 研二	助教

■ 器楽科

ピアノ	植田 克己	教授
	青柳 晋	准教授
	角野 裕	教授
	伊藤 恵	教授
	東 誠二	准教授
	渡邊 健二	教授(兼)
	迫 昭嘉	教授
	有森 博	准教授
	江口 玲	准教授
	坂井 千春	准教授
	廣江 理枝	准教授
オルガン	清水 高師	教授
ヴァイオリン	澤 和樹	教授(兼)
	漆原 朝子	准教授
	玉井 菜採	准教授
	ビエール・アモイヤル	招聘教授
ヴィオラ	川崎 和憲	教授
チェロ	河野 文昭	教授
	中木 健二	准教授
コントラバス	永島 義男	教授
フルート	高木 綾子	准教授
オーボエ	小畑 善昭	教授
クラリネット	山本 正治	教授
サクソフォーン	須川 展也	招聘教授
トランペット	栃本 浩規	准教授
トロンボーン	古賀 慎治	准教授
打楽器	藤本 隆文	准教授
室内楽	松原 勝也	教授
	市坪 俊彦	准教授
	日高 剛	准教授
古 楽	野々下 由香里	教授
	大塚 直哉	准教授

■ 指揮科

尾高 忠明	教授
高関 健	招聘教授

■ 邦楽科

長唄三味線	小島 直文	准教授
長唄	味見 純	准教授
箏曲(山田流)	萩岡 松韻	教授
(生田流)	吉川 さとみ	准教授
能楽(観世流)	関根 知孝	教授
(宝生流)	武田 孝史	教授
邦楽囃子	盧 慶順	准教授
日本舞踊	露木 雅弥	准教授

■ 楽理科

(大学院音楽文化学音楽学)		
土田 英三郎	教授	
片山 千佳子	教授	
大角 欣矢	教授	
塚原 康子	教授	
植村 幸生	教授	
福中 冬子	准教授	

■ 音楽環境創造科

(大学院音楽文化学音楽音響創造)		
西岡 龍彦	教授	
亀川 徹	教授	
丸井 淳史	准教授	
(大学院音楽文化学芸術環境創造)		
熊倉 純子	教授	
市村 作知雄	准教授	
毛利 嘉孝	准教授	

■ 音楽文化学(大学院)

音楽教育	佐野 靖	教授
	山下 薫子	教授
ソルフェージュ	照屋 正樹	准教授
	テシュネ、ローラン	准教授
応用音楽学	枝川 明敬	教授
	畑 瞬一郎	教授
音楽文芸	檜山 哲彦	教授
	杉本 和寛	教授
	大森 晋輔	准教授
	侘美 真理	准教授
音楽研究センター	関根 和江	助教

大学院 映像研究科

■ 映画

監 督	黒沢 清	教授
	諏訪 敦彦	教授
	筒井 ともみ	教授
脚 本	梶井 省志	教授
プロデュース	柳島 克己	教授
撮影照明	磯見 俊裕	教授
美 術	長嶋 寛幸	教授
サウンドデザイン	筒井 武文	教授
編 集	馬場 一幸	助教

■ メディア映像

	桂 英史	教授
	桐山 孝司	教授
	佐藤 雅彦	教授
	藤幡 正樹	教授
	木村 稔	助教

■ アニメーション

	伊藤 有希	教授
	岡本 美津子	教授
	山村 浩二	教授
	布山 タルト	教授
	村上 寛光	助教

大学美術館

学芸企画	薩摩 雅登	教授
	古田 亮	准教授
美術情報	原田 一敏	教授
	黒川 廣子	准教授
	芹生 春菜	助教

社会連携センター

	伊東 順二	特任教授
	佐藤 正人	特任教授
	平 論一郎	特任講師

言語・音声トレーニングセンター

英 語	磯部 美和	講師
	コリンズ キム	助教
独 語	シュタイン、ミチャエル	外国人教師
	ククリンスキ、アンドレア	助教
伊 語	シェヴィーニ、アレクサンドロ	助教
仏 語	ヴィエル、エリック	助教

演奏芸術センター

	松下 功	教授
	湯浅 卓雄	教授
	大石 泰	准教授
	野口 千代光	准教授
	岩崎 真	助教

芸術情報センター

	松井 茂	助教
	嘉村 哲郎	芸術情報研究員
	中村 美恵子	芸術情報研究員

保健管理センター

医 師	須甲 松信	教授
	内海 健	教授

注1) システム保存学(連携)の教員は、東京文化財研究所の研究員が、本学教員として併任しています。
注2) 平成26年5月末現在。

絵画科・日本画専攻

Japanese Painting

日本画の基本的な技法を通して材料の理解と造形感覚とを体得させ、作家として創造活動ができるような能力を養うことを目標としています。

主な授業科目としては、人物・風景・静物・動植物画の制作、版画、壁画、人物素描、古典模写、材料研究、写生旅行があり、学年別に定められた時間内で履修させます。なお、この教育に当たっては、学生を教員に分属させず、全教員が指導する方法をとっています。

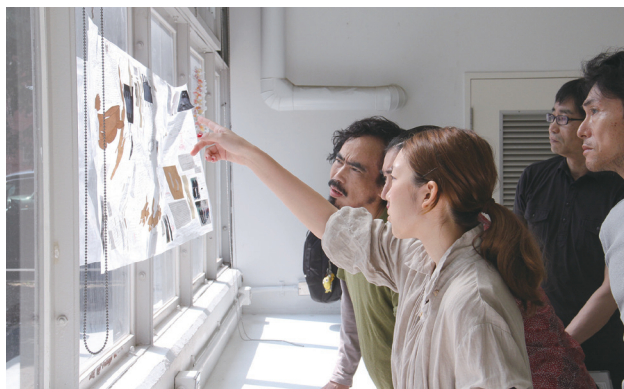


絵画科・油画専攻

Oil Painting

美術・造形表現の根幹を成してきた、絵を描くということの基礎を学び、21世紀の新しい絵画表現及び活動ができる専門家としての能力を養うことを目標とします。この

油画実技教育には、様々な美術活動を行う油画全教員が指導にあたります。1・2年次の基礎課程では、様々な手法によるドローイング(素描)を習得させ、自己発見と取材の量、及びその深化に挑ませます。加えて油画、版画、壁画、油画技法材料の各実技実習を通じて、絵画表現の歴史を構成する様々な表現媒体・技術・知識に触れる機会を持たせます。3・4年次の専門課程では各自のテーマに添った創作研究を行い、必要に応じてより専門的な授業、実習やプロジェクトが受けられます。これら基礎課程、専門課程を通じて絵画を中心軸にとり、映像、造形、インスタレーション、そしてそれらを横断する表現の創作研究を行うことができます。卒業生のなかから、世界で活躍する多くの美術家を輩出しています。



版 画

木版・銅版・リトグラフ・シルクスクリーンの主要4版種の実習を通じ、基礎的版画技術を修得し、各版種の特徴的な表現への理解を深めます。

さらに、各自の自主的な創作・研究では自らの版表現を展開させ、その新たな可能性を探ります。



壁 画

モザイク、フレスコ、ステンドグラス等、建造物と深いつながりを持つ壁画表現は、長い人間の営みの中で自然環境と素材と技術が一体となって生み出された芸術です。造形することの根源的な要素となるこれらを基礎研究としながら、各自の創作研究では独創性を重視し、現代美術、アートプロジェクトによる制作活動など、社会との関わりの中で自己の表現を模索し、あらゆる素材を思考しながら知と感性を養い、表現の可能性を探ります。



油画技法・材料

絵画表現の展開を支えてきた絵画材料と絵画技術、またそれを可能にした自然科学のおよび文化的「知」の背景について、実技実習や講義、演習を通じて理解を深めます。

また、各自の自主的な創作・研究の実践の中で絵画表現の新たな可能性を探ります。

彫刻科

Sculpture

広く造形研究の理解に重点を置き、将来、作家として自由な創作活動を行うための基礎的能力を養います。

指導に当たっては、学年制を採用し担当教員の交代によって、教育が一方向的に偏することを避けています。

学部においては、1・2年次を基礎課程、3・4年次を専門課程とし、学生は実習科目として塑造及び木彫・金属・石彫・テラコッタ等を各担当教員の指導のもと履修します。



工芸科

Craft

1年次及び2年次前期は工芸領域に関わる基礎的な表現、造形感覚を養います。

2年次後期からは各専攻に分かれ、専門技術の修得を通して自己の工芸表現の確立を目指し、将来各分野において活躍しうる人材を育成します。

なお、各専攻の1学年の学生数は、5名前後となっています。



彫 金

彫り・打出し・象嵌・接合・七宝等の基礎技法を通じて伝統的背景、意匠を理解し、素材への知識を深め現在における創作表現の在り方を研究します。彫金技法とジュエリーの分野を設け生活空間全体を意識した専門性の高い指導を行います。



鍛 金

鍛金の基本的技法となる金属の塑性加工技術である冷間加工の絞り技法と熱間加工の鍛造技法および各種接合、溶接技法、切削技術を習得し、各種の制作実習を通して金属造形の基本的知識と総合的な創作力を養う事を目標としています。

主な授業科目としては、基本手絞り実習(回転体)、変形絞り(動物制作)、鍛造実習、接合実習(木目金制作、蟬付け等)があります。

これらの基本的な技法に加え、各種溶接技術、機械加工技術の習得等により幅広い創作力の向上を図っています。



鑄 金

鑄金制作の基本的知識と技術を習得し、併せて鑄金の特質である計画性及び造形力を養うことを目的としています。

主な授業内容としては、原形制作、鑄型制作、合金の溶解、仕上加工、表面処理、着色等、一貫した鑄金の工程を修得します。鑄金造形の様々な技法と素材を通して、逐次高度な知識と技術を修得し幅広い創作力の向上を図るようにカリキュラムが編成されています。



漆 芸

天然の素材である漆を、塗料・接着剤・造形素材・絵画材料として多角的に教育・研究しています。

原材料である漆の苗木から、掻き取り、精製までを体験し、それらを扱うための基本的技術及び知識を習得していきます。

漆装飾実習「変り塗」、漆装飾実習「蒔絵」、木胎漆造形、乾漆造形、漆芸歴史研究などの様々な授業を通じ漆素材と向き合い、造形的な美術作品や生活に寄与する作品を作り上げ、世界に活躍できる漆芸作家を育成するとともに、教育者、研究者などとして幅広く活躍できるよう教育しています。



陶 芸

実習を通して、陶芸に関する基本的技術及び知識の概要を修得させることを目標としています。

主な授業内容は、ロクロ成形、窯炉焼成、釉薬及び絵具テスト、石膏型成形、生産工芸のための成形等の陶芸技術研究を修得し、自主的な制作を中心として現代の創造的な陶芸家となるための指導を行っています。



染 織

染織制作の基本的知識と技法の修得により、染織造形分野で将来活躍できる人物の育成目標としています。

主な授業内容は2年次後期及び3年次は、染技法として、糊防染・ろう防染・シルクスクリーン捺染、織技法として、綴織・緞織・二重織等の基本技法を実習し、4年次は各自の研究計画に基づいて技法を選択し、自主的な制作を行っています。プレゼンテーション・情報リテラシーを重視し、卒業後の進路に生かす授業も取り入れています。



デザイン科

Design

デザイン科は、社会と芸術を結ぶ表現の可能性を追求し、質の高い生活環境を創造するための教育を目指しています。そのための学部教育では、メディア別の専門教育ではなく、広い視野に立って、新しい文化を創造し得る総合的な造形力と知識を養うことを目標とします。

専門教育ではなく、広い視野に立って、新しい文化を創造し得る総合的な造形力と知識を養うことを目標とします。

1年次、2年次は、全学年共通した観察と表現をベースとしたデザイン課題を行い、基本的な造形力と技法及びデザイン理論を学びます。

3年次は、視覚、空間、機能、描画装飾、映像画像、環境設計の各造形領域を柱として学生の自由な表現に基づいたグループ分け指導により、デザインの表現力と理解を深めていきます。また、専門別に配置された各論を自由に選択することにより、多元的な視野からデザインを総合的に理解する力を高めていきます。

4年次は、各自の研究テーマに応じて、それぞれの領域の教員指導のもとで、卒業制作を行います。



建築科

Architecture

建築科は、1887年創設の本学の前身である東京美術学校のもとに、1902年に図案科建築教室が設置されたことから始まりました。その後1923年に建築科

となり、今日まで我が国の建築界を代表する多くの建築家を輩出してきました。

本科が他大学の建築学科と大きく違うところは、日本の多くの大学が属する工学系ではなく、美術系に属し、建築家の養成を目指している唯一の国立の教育機関ということです。

もう一つの特色は、建築教育の軸を建築設計に置いていることです。建築設計実技に重点がおかれ、それを通して建築の知識や技術を学び、建築家として必要な総合的な能力を養っていきます。それらの教育方針は少人数教育によって初めて可能になります。専任教員9人に対し本学の一学年の定員は学部15人、大学院修士16人という恵まれた環境です。そのなかで個性と創造力を伸ばすために、型にはめない自由で緊密な教育が行われています。



先端芸術表現科

Inter-Media Art

先端芸術表現科は、自由でオープンな学科です。表現のためには「何を使って、何を作ってもいい。」そんな考えから始まっています。自分を見つめ返すための素材も道具もいったんオープンにしたところから、表現の作業をスタートさせてみたいと考えたのです。その上で、広く社会に開かれた視点を持ち、多様な思想や感性を理解し、他者との共同作業やコミュニケーションを積極的に行える表現者として育てて欲しいと考えています。

学部前半では、多様なメディアや技法、そしてさまざまな考え方(空間・音・画像・コンピュータ・言語・身体など)に触れますが、その次に私たちが、「プロジェクト」と呼んでいる、企画と作品制作、展示の場づくりと批判的な思考が、同時に進行するような、創造的な表現のためのプロセスを体験して行きます。また、後半は、自己の創造的表現への実現展開を11人の教員と共に発展させて行くことになります。

卒業後は、自己の問題意識、体験と思考、創造性をおおいに発揮して、地域におけるアートの現場をつくったり、次世代メディアの機能と表現を結びつけたり、人間と人間、人間と社会のあり方を表現したり、提言することができる人材を育てます。

私たちは、新しい芸術のあり方に興味と意欲のある学生を求めています。



芸術学科

Aesthetics and Art History

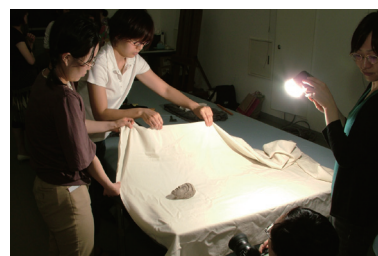
芸術学科は、主に美学と美術史学を通して芸術への理解を深めることを目標としています。

専門的な授業科目として、美学、日本美術史、東洋美術史、西洋美術史、工芸史などの概説、特殊講義、演習が開講されており、学問的な手続きに則って美術作品の分析や評価をおこなう技術と感覚を養うカリキュラムが用意されています。

また、本学科の学生は、実制作の経験を通じて美術作品を理解することができるよう、絵画・彫刻などの基礎実技を履修することになっています。この点は、他大学の美学・美術史学科に比べて、本学科の大きな特色といえるでしょう。

3年次の後半には各自の専攻分野を選択し、卒業にあたっては、各分野の専門教員の指導のもとに論文を作成し、提出しなければなりません。

卒業生は、専門研究者や美術館・博物館学芸員の他、出版、マスコミ等、美術と関わる幅広い分野で活躍しています。



作曲科

Composition

作曲に関する実技及び理論を研究、教授します。授業の内容は、一般の諸学科目のほか、専門的教育科目として、ソロ・アンサンブル・オーケストラ作品などの器楽曲、声楽曲等の作曲についての実技や理論を主要な科目とします。また、これらの基礎として、ピアノやソルフェージュなどの必修科目があります。さらに、各種楽器(邦楽器も含む)の実技や、その他の科目を選択履修することもできます。



器楽科

Instrumental Music

ピアノ

独奏技術を主体としたレッスンのほかに、合奏、室内楽、伴奏、ソルフェージュ等の授業が重視され、必修科目となっています。期末試験で優秀な成績を修めた学生には、大学オーケストラ

との練習と共演の機会が与えられています。

なお、チェンバロをはじめその他の楽器及び独唱も選択科目として履修することができます。

関連学科目としての音楽理論(和声、対位法、楽曲分析)、音楽史等のほかに、楽曲の系統的研究のゼミナールも開講されています。



オルガン

オルガン(パイプオルガン)に関する実技及び理論を教授して高度な研究能力を備えた演奏者を養成することを目的としています。

授業内容としては、大学としての一般の諸学科目のほか、専門的教育科目としてオルガン実技、通奏低音実習、オルガン概論等が主要科目としてあり、これらの基礎としてピアノ、ソルフェージュ等の実技、和声その他の音楽理論、音楽史等の必修科目があります。



古 楽

古楽講座においては、主に16世紀後半から18世紀までのヨーロッパ各国の音楽を扱い、各作曲家の属する時代の楽器や演奏様式の研究をふまえて、現代における最善の再現方法について研究します。

個々の分野の技術的研究のみではなく、バロック音楽の共通の基礎である通奏低音の概念とそれを基礎としたアンサンブル演奏を重視してカリキュラムを形成し、従来のレッスン形式のみではなく、月例のVorspielabendやゲスト講師を迎えてのマスタークラスなどを予定しています。



声乐科

Vocal Music

声乐に関する実技の研究・教育を通じ、声楽家としての基礎的課題を習得させるため、次のような履修課程を組んでいます。専門実技は、個人レッスンが中心であり、発声法や、歌曲・オペラの表現解釈法などを教授しています。クラス授業として合唱(1年～3年)・声楽アンサンブル(3年～4年)・舞台語発音・オペラ実習・声楽演習などの専門科目のほか、歌唱に関わりの深い外国語や音楽史を始めとする一般諸学科目、音楽理論などが開設されています。また、音楽表現の基礎となるソルフェージュ・理論(和声)・器楽実習(ピアノ等)などは必修科目のひとつです。



弦楽器

弦楽器専攻生のコースはヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス及びハープのそれぞれの専攻に分かれ、演奏家として必要な高度の技術と、芸術家として優れた人格を育てることを目的としています。

個人レッスンのほか、合奏の基礎を身につけるため各種の場が用意され、1年次において弦楽合奏、2年次以降はオーケストラがあります。

また、室内楽は1年次は必修授業として基礎的なものを、2年次以降は選択授業としてきめこまかい指導が受けられ、協調の精神を自然に身につけられるよう配慮されています。また選ばれた学生には大学オーケストラと協奏曲の協演の機会が与えられたり、室内楽では公開の演奏会において、研究成果を発表する機会が与えられます。

管打楽器

管楽器は、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォーン、ホルン、トランペット、トロンボーン、ユーフォニアム及びチューバと10種類の楽器に分かれ、打楽器は主にパーカッション及びマリンバアンサンブルを通して、すべての打楽器に精通し、それぞれの専攻を通して、芸術家として高い人格と感性あふれる人材を育てることを目的としています。

演奏技術の基本、理論と実践を徹底させ、ジャンルを超えて様々な音楽へのアプローチを試み、より高度な技能と深い音楽表現へのステップの場が用意されています。授業の内容は、教員とその人間的、精神的交流を重視した個人レッスンを主体に、演奏家として必要なソルフェージュ、ピアノ実技、音楽理論、音楽史等が用意され、オーケストラ、吹奏楽、室内楽等による合奏研究を行っています。

なお、器楽科学生で室内楽を専攻する学生には、大学院に講座が開かれています。

指揮科

Conductors

指揮者のかかわる、あらゆる演奏分野の指揮者を育成します。これは安易に完成への道を歩めるものではありませんので、在学中には「指揮の技法」の修得と共に、「音楽」そのものを学ばせます。

授業内容は、基礎としての音楽全般に対する知識、各楽器を知るための実技実習、専門分野での指揮法、これを支えるソルフェージュ、スコアリーディング、ピアノを含めた鍵盤楽器等々、進んではオーケストラによる指揮実習が行われます。



邦楽科

Traditional Japanese Music

三味線音楽、箏曲、尺八、能楽、能楽囃子、邦楽囃子、日本舞踊、雅楽に関する実技と演奏理論を研究、教授して高度な能力を備えた演奏家を養成します。学生は各専攻実技のほかに専攻外の各種邦楽、洋楽、ソルフェージュなどの実技を必修又は選択により履修します。

また、実技ばかりでなく、演奏理論や関連学科目(西洋音楽理論を含む)などを併せ履修することによって、幅広い識見を持った演奏家あるいは音楽社会人が育つようにカリキュラムが組まれています。なお、教員免許状の取得を希望する者には、入学直後、ピアノの学内選考試験を実施するので準備が必要です。



楽理科

Musicology

楽理科は音楽学(西洋音楽史、日本・東洋音楽史、音楽民族学、音楽美学など)を研究・教授し、将来音楽の学問的研究及びそれに関連した仕事にたずさわる人材の養成を目的としています。したがって、楽理科の授業内容は音楽学専門科目の講義、演習を中心に広く音楽の各分野にわたり、外国語の修得も重視されます。また、音楽の実技や音楽理論も必修とされ、音楽の実践に密着した研究が要求されます。

なお、楽理科の大学院教育(修士課程・博士後期課程)は、音楽文化学専攻の「音楽学」研究分野として行われます。



音楽環境創造科

Musical Creativity and the Environment

音楽環境創造科は、21世紀の新たな音楽芸術と、それにふさわしい音楽環境・文化環境の発展と創造に資する人材育成をめざし、2002年に新設されました。

現代社会では、領域を越えた感性、知識、表現技術を活用できる人材が求められています。本学科では、テクノロジーや社会環境の変化に柔軟に対応し、領域横断的な発想を具現化できる能力を養うべく、理論と実践の両面から教育研究に取り組んでいます。

具体的には、

- ・音楽や音響に関する研究
- ・映像、身体、言語、空間、メディアなど、音楽に隣接する表現分野の研究
- ・コンピュータによる音響作品の創作や映像、身体表現、メディアのための音楽制作
- ・アートマネジメントや文化社会学、文化研究など、芸術と社会の関係に関する研究を通じて、芸術やそれを取り巻く環境を総合的に学習することを基本としています。

この学科を卒業した学生は、新しい芸術創造や芸術運営の現場はもとより、さまざまなメディアや企業、研究・教育機関、行政、NPOなど広く社会全般で活躍することが期待されます。

卒業生たちは、放送局、新聞社、広告会社などのマスコミ関係、文化ホールや美術館などの芸術文化施設、録音スタジオ、WebデザインなどのIT系企業、アミューズメント業界などに就職するほか、音楽制作や劇団に参加して表現活動が続けたり、イベント・プロデュースなどで活躍しています。また、本学大学院はじめ国内外の大学院に進学し、より専門性を極める卒業生も数多くいます。



大学別科

Practical Music Course

音楽の専攻実技を教授する2年間のコースです。

専攻実技には、声楽、器楽(ピアノ・オルガン・弦楽器・管打楽器、古楽)、邦楽(三味線音楽・邦楽囃子・箏曲・尺八・能楽・能楽囃子)があり、個人指導による授業が行われます。ただし、単位の認定及び教員免許等の資格は得られません。修了者には、「修了証書」を授与します。

より広い視野に立って芸術についての精深な学識と技術を受け、芸術の各分野における創造、表現、研究能力又は芸術に関する職業等に必要な高度の能力を養い、さらには自立して創作、研究活動を行うに必要な高度の能力を備えた研究者を養成するために大学院美術研究科が設置され、修士課程（前期2年の課程）及び博士後期課程（後期3年の課程）に区分されています。

修士課程(2年)

取得学位名称

修士(美術)	絵画、彫刻、工芸、デザイン、建築、芸術学の各専攻
修士(芸術表現)	先端芸術表現専攻
修士(文化財)	文化財保存学専攻

絵画専攻	日本画
	油画、版画、壁画、油画技法・材料
彫刻専攻	彫刻
工芸専攻	彫金、鍛金、鍍金、漆芸、陶芸、染織、木工芸、ガラス造形
デザイン専攻	デザイン(視覚・演出、視覚・伝達、空間・演出、空間・設計、機能・演出、機能・設計、環境・設計、映像・画像、描画・装飾、企画・理論)
建築専攻	建築設計、環境設計、構造計画、建築理論
先端芸術表現専攻	先端芸術表現
芸術学専攻	美学、日本・東洋美術史、西洋美術史、工芸史、美術教育、美術解剖学
文化財保存学専攻	保存修復、保存科学、システム保存学

博士後期課程(3年)

取得学位名称

博士(美術)	美術専攻
博士(学術)	
博士(文化財)	文化財保存学専攻

美術専攻	日本画
	油画
	彫刻
	工芸
	デザイン
	建築
	先端芸術表現
	芸術学
文化財保存学専攻	保存修復、保存科学、システム保存学



美術学部の各科の講座には、それぞれ大学院修士課程・博士後期課程が設置されています。

それ以外に、大学院美術研究科には、以下の専攻および研究分野があります。

工芸専攻

木工芸

多様な木工世界のうち、木を組むことを中心に捉えながら、幅広い知識と技術を習得し、素材に対する深い認識を養うことを研究目的とし、現代社会のなかで有効な造形の在りかたを提示できる創造力を養います。

用途を持つもの、持たないもの、様々な形が創出されます。表現は自由で独創的であるのは当然ですが、一過性のものではなく時間の流れに耐えうる内容と普遍性をもった作品を、実技・理論両面から探求しています。



ガラス造形

ガラス素材を中心とした造形活動を行うことを目的に、素材研究と技法の研究を行います。

キルンワーク（パートドベール、コールドキャスト）、ホットワーク（吹きガラス等）、コールドワーク（カット、サンドブラスト等）、多様なガラス素材の表現方法を活用して、工芸、オブジェ、空間造形等の幅広い分野でのガラス素材の可能性を追求します。また、ガラス素材と多様な工芸素材との関連性を探ります。



文化財保存学専攻

Conservation

本専攻は大学院のみの独立専攻です。文化財保存学における基本的な知識及び技術の修得と研究、併せて文化財の保存修復と研究にあたる専門家の養成を目的としています。保存修復・保存科学・システム保存学の3分野9講座からなっています。

保存修復

日本画・油画・彫刻・工芸・建造物の5講座。

それぞれの対象に応じた修復技術の修得と研究、併せて材料と古典技法の調査・研究を行っています。

保存科学

文化財測定学・美術工芸材料学の2講座。

文化財及び美術工芸品の材料科学的知識の修得とそれらの性状・劣化現象の研究を行っています。

芸術学専攻

美術教育

美術教育研究室では、美術の教育的意義や美的人間形成について実技制作と理論研究から、多角的に研究に取り組みます。本研究室は1963（昭和38）年に大学院の独立講座として設立されて以来、有為な存在を多数輩出し、修了生は大学をはじめとした教育機関、美術館、作家活動など様々な分野で活躍しています。

実技制作では、表現者として各自の専門的な能力を高めることを目指しています。

理論研究では、表現の根源にある思想や人間形成における美術の本質的意義などについて探求し、実技制作と関連づけながら各自の問題意識を理論的に深める研究を行います。

本研究室では実技制作や美術教育理論の研究はもとより現在では美術解剖学や図学・色彩学などの研究にも取り組み、また医療や福祉など人間が生きることに関わる諸学問との結びつきにも視野を広げて美術の重要性を考察しています。指導に当たる教員の専門分野は彫刻・絵画・工芸・教育学・美術解剖学など幅広く、多様な知見を得られます。



美術解剖学

本研究室は、日本で唯一の、美術解剖学を専門に教育・研究を行っている大学院のコースです。

人体の骨格や筋肉について学び、それを絵画や立体造形の創造や、あるいは美術作品を分析・批評するための基礎技術として活用することを目的としています。本学における美術解剖学の歴史は、明治24年（1899年）の森鷗外（もりおうがい）の講義に始まりますが、伝統のスタイルを重んじつつも、新しい時代の美術に積極的に関与しています。卒業生には、美術解剖学の専門家として大学で講義をする者を始め、ギャラリーや出版社、また企業でのデザイナーとして勤務する者、さらにはアーティスト活動をする者まで、幅広い人材を輩出しています。



システム保存学

連携機関として東京文化財研究所の協力を得ています。保存環境学・保存修復材料学の2講座。

文化財の環境と修復のための材料や技法の科学的かつ実践的な知識の修得と研究を行っています。

大学院 音楽研究科

より広い視野に立って芸術についての精深な学識と技術を受け、芸術の各分野における創造、表現、研究能力又は芸術に関する職業等に必要な高度の能力を養い、さらには自立して創作、研究活動を行うに必要な高度の能力を備えた研究者を養成するために大学院音楽研究科が設置され、修士課程（前期2年の課程）及び博士後期課程（後期3年の課程）に区分されています。

修士課程(2年)

取得学位名称

修士(音楽) 全専攻

作曲専攻	作曲
声乐専攻	独唱、オペラ
器楽専攻	ピアノ、オルガン
	弦楽、管打楽、室内楽
	古楽
指揮専攻	指揮
邦楽専攻	三味線音楽、箏曲、尺八、能楽、能楽囃子、邦楽囃子、日本舞踊
音楽文化学専攻	音楽学、音楽教育、ソルフェージュ、応用音楽学、音楽文芸、音楽音響創造、芸術環境創造

博士後期課程(3年)

取得学位名称

博士(音楽)
博士(音楽学)
博士(学術)

音楽専攻	作曲
	声乐
	鍵盤楽器
	弦・管・打楽器
	室内楽
	古楽
	指揮
	邦楽
	音楽文化学



大学院音楽研究科(修士課程・博士後期課程)は、作曲、声楽、器楽、指揮、邦楽、音楽文化学の各専攻から成り立っています。

ここでは、音楽文化学専攻に属する各研究分野を紹介します。

音楽文化学専攻

Musicology and Music Studies

音楽学

「音楽とは何か?」この永遠の問いに、研究を通じて学問的に答えようと試みるのが「音楽学」です。もちろんここでいう「音楽」には、いわゆる「クラシック音楽」だけでなく、古代から現代にまで至る世界中のあらゆる種類の音楽が含まれます。そのアプローチの視点や方法も実にさまざまです。音楽の構造や理論について論じたり、音楽をめぐる哲学的思索を行ったり、音楽が人々の生活や社会・環境・世界観などどう関わり合っているかを探ったり、楽譜や文献その他の資料を調べてその歴史を跡づけたり……等々、音楽学の世界は無限の広がりを含んでいます。

この音楽学の専門的な教育を行い、将来、音楽の学問的研究及びそれに関連した仕事にたずさわる人材の養成を目指すのが「音楽学」研究分野です。その際、理論と実践のバランスを重視し、あくまで実際に演奏され、鳴り響き、聴かれる音楽を踏まえた研究を行うことが求められます。

音楽学の多面的な切り口に応じて、本研究分野は大きく3つの講座に分かれています。学生は、その中でさらに個々の教員の研究室に所属して研究を進めて行くことになります。

音楽教育

音楽教育は、音楽と人間の多様なかかわりを「教育的視点」から追究する研究者・実践者を育成する研究分野です。

ここで学ぶ学生たちの研究対象は、ただ学校の音楽教育にとどまらず、音楽の専門教育、幼児の音楽教育、障がい児の音楽教育、社会教育としての音楽教育など多岐にわたっています。さらに、研究論文の作成とともに、専門実技の研鑽が課せられている点(音楽の専門性を生かした音楽教育研究)、授業研究等を通して様々な実践現場と連携して教育研究を推進している点(教授・学習の実際に根差した音楽教育研究)などが本研究分野の大きな特色です。これまでの修了生の多くが、教員養成系・保育者養成系の大学や音楽大学等で音楽教育担当の教員として活躍しています。

学生一人一人の研究に関しては、複数の教員と学生が常に密接にかかわりながら、その方向や内容を決めるような指導体制が確立されています。

ソルフェージュ

「ソルフェージュ」研究分野ではソルフェージュとソルフェージュ教育を幅広く扱い、日本における西洋音楽の受容と同化という観点から、これらの理論的・実践的方法論を多角的に研究しています。

これらの基盤となる音楽学部では聴覚とリズムの訓練、内的聴取能力および読譜能力の習得と向上、および音楽理論を学習する極めて広範かつ総合的な専門教育が行われており、実技との関連性をより重視した様々な展開クラスも開設されています。

大学院音楽研究科では学部での研究活動を更に発展させ、様々な音楽様式、音楽実践に対応しつつ、深い音楽的教養全般を習得したソルフェージュ教育者や研究者としての資質を備えた音楽家の育成を目的としています。

応用音楽学

応用音楽学では、音楽の知識や技術を、個性化・高度化を目指す社会の中で活用し、文化の創造と発展のためにいかに応用し役立てていくかを考え実践する「生きた学」を標榜しています。具体的には、音楽文化施設や音楽芸術団体の企画・運営(アートマネジメント)を行う人材、政府・自治体及びその関係機関で、音楽文化の振興・普及や伝統的な音楽・芸能の保存・継承に携わる人材、各種の療育施設等で音楽療法の仕事を担う人材、その他幅広く音楽文化の振興と普及の仕事に従事する人材の養成を図ることをねらいとしています。また、博士後期課程では、大学や研究機関でこれらの各分野の教育研究に従事する研究者の育成を行っています。

音楽文芸

音楽文芸では、音楽に関わる言語表現を研究対象とし、音と言葉の関係性について探求することを目的としています。具体的には、オペラ・歌曲・ミュージカル・謡曲・歌舞伎・浄瑠璃等における、音楽と詞章とのかかわりやその背景についての研究を行っています。

研究方法としては、詩学・韻律学・修辭学・文献学・書誌学等の知識をもとに、歌詞・戯曲の内部構造の分析を行うことや、注釈的読解を通じて、作品を成り立たせている言葉そのものの研究を深めるとともに、音楽と結びついた言語の表現効果や、テキスト・演出の比較研究、さらにはテキストの周辺領域を視野に入れた上で、作品を文化的・社会的位相の中に捉える音楽文化学的なアプローチを行います。

修士課程を修了した学生は、博士後期課程に進学し学位を取得したり、マスコミ・出版社・芸能プロダクションに就職するなど、社会において幅広く活躍しています。



音楽音響創造

「音楽音響創造」研究分野では、母体となる音楽学部「音楽環境創造科」で掲げる「21世紀の新たな芸術と、それにふさわしい環境の発展、創造に資する人材育成」という教育理念を引き継ぎ、音楽、音響関係の分野において、より専門的な知識、技能の習得を行い、トーンマイスターと呼ばれる録音制作ディレクター・エンジニア、作曲家、プロデューサーなど、高度な専門職業人の養成に重点を置きます。

音楽と音響に関わる知識や技術を身につけた上で、それらを横断する様々な作品制作(映像・舞台・身体表現やメディアに関わる音楽音響作品)、あるいは、新しい録音技法によるサラウンド制作など、先進的な研究テーマに取り組んでいます。

芸術環境創造

「芸術環境創造」研究分野では、音楽、舞台芸術、映像、メディア表現など、さまざまな芸術表現の研究およびそれらと社会との結びつきを多角的に研究します。学部「音楽環境創造科」の理念を引継ぎ、21世紀の新たな芸術と、それにふさわしい環境の発展と創造に資する人材育成のために、幅広い芸術表現とそれを取りまく社会環境や文化全般について、より専門的な知識と技能の習得を行います。研究は文化事業の企画運営、さまざまな文化的事象の調査研究、表現作品の制作など、実践を取り入れた多様な形式で取り組まれます。具体的には、文化政策やアーツマネジメントの実践的研究、劇場やフェスティバル等のプログラミングや演劇論、振付論の研究、文化芸術全般の運営やそれを取りまく文化環境に関する実践的研究、文化理論研究、メディア芸術理論および調査研究、ポピュラー音楽研究、そして芸術文化と社会の関係を参与観察しながら考察する実践的研究などを行います。ポピュラー文化研究、そして芸術文化と社会の関係を参与観察しながら考察する実践的研究などを行います。

大学院 映像研究科

平成17年度に新設された学部を持たない大学院だけの独立研究科です。研究科は「映画専攻」「メディア映像専攻」「アニメーション専攻」の3専攻と博士後期課程(研究科共通)によって構成されています。

映像研究科全体のテーマは、映像メディアを通した「物語」の追求にあり、映画、メディア映像、アニメーションそれぞれの表現分野における作品制作を通した研究教育を行い、アカデミックな拠点形成に向けて活動しています。人間社会の形成は、その社会が紡ぐ物語によってなされてきたと考えることができます。映画や映像といったメディアが国境を越えて世界をつなげるようになった現在、物語を伝える手法は「声」や「文字」から映像へと移行してきました。20世紀国際社会の変転において、映画やテレビ放送が果たした役割は計り知れないものがあります。

本研究科では、映像メディアによる表現活動を通して、映像が持つ力をよく理解し、作り手としての視点から、表現の可能性を掘り下げていきます。映像の歴史は150年あまりと、比較的新しいために、技術変革の連続であり、映像表現における可能性は、カメラやフィルムなどの革新とともに進化して来ました。表現者としての私たちはこうした進化、変化を冷静に受け止める必要があります。つまり、私たちの使命は、技術を早急に取り込むことなく、新しい技術に対して常に革新的な表現を提案することにあるからです。なぜなら人間にとって大切なことは、技術そのものではなく、その技術によってこれまで伝えることのできなかったどのような表現が可能になるのか、他者とどのような新しい関係性を共有できるのかにあるからです。

また、博士後期課程では、映画、映像に関する理論や技術をメディアの側面から研究する「映像メディア学」を提唱し、研究推進します。

修士課程(2年)

取得学位名称

修士(映像)

映画専攻

映画表現技術(監督、脚本、プロデュース)

映画制作技術(撮影照明、美術、サウンドデザイン、編集)

メディア映像専攻

創造表現
(メディアデザイン、メディアアート)

構想設計
(メディア技術、メディア研究)

アニメーション専攻

研究・理論
(研究・理論)

創造表現
(企画制作、平面アニメーション、立体アニメーション)

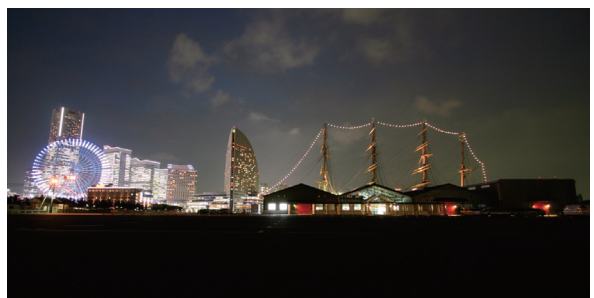
博士後期課程(3年)

取得学位名称

博士(映像)

博士(学術)

映像メディア学専攻 映像メディア



修士課程

映画専攻

Film Production

映画の制作は、ひとりではできません。シナリオライター、演出監督、撮影、照明、音楽、美術、編集といったさまざまな才能が、相互に響きあうことでなりたっていますが、現実的には、こうしたさまざまな才能をどのようにプロデュースするか、制作に入る前から、できあがった作品をプロモーションしてゆく人材の育成も重要です。映画専攻では、600m²の大型撮影スタジオ設備をはじめとして、編集、MA設備を使用した劇映画の実制作を通して、国際的に流通する物語を作り出せるクリエイターを養成することを目的としています。

これまで培われてきた日本映画製作の手法には、良い意味でも悪い意味でも日本独自の手法があり、大学が映画製作者養成に乗り出す最も大きな意味は、こうした現状を客観的に体系化することにあります。特に、映画作品においては、監督の役割ばかりが強調される傾向があり、制作に関わる細部の仕事が教育現場において軽んじられる傾向があります。本専攻では、撮影、照明、美術、音楽、編集など、技術スタッフが持つ創造性への高い能力にたいする社会的な評価を取り戻すこともその目的のひとつに据えています。



メディア映像専攻

New Media

メディア映像専攻では、映画以外のすべての映像表現について考えてゆきます。映画という映像を通して物語を語るフォーマットそのものは未来において普遍であると思われますが、映像メディアの持つ可能性の中には、映画というフォーマット以外の可能性が潜んでいると思われます。それは1900年のパリ博以来行われてきたさまざまな実験の中で、現在の映画へと収束しなかったメディアの可能性を拾い上げる行為に近いかもしれません。そうした意味で本専攻では、映像表現技術の根源に立ち返り、技術と表現のコラボレーションを行い、新たなメディア技術を用いて設計した新たな表現伝達メディアの上で、機能する作品を実験的に制作しています。

教員による個別研究指導を中心として、目的を持ったメディアのデザイン、メディアによるアート、技術開発研究を通じたコンテンツ・ウェア、文化財研究を通してのプロデュース等を行い、同時に、これらをまたぐ横断的なプロジェクトの実現を行っています。

アニメーション専攻

Animation

日本において、「アニメーション」は、世界的な文化として認知されたジャパニメーションから映像表現としての短編アニメーション、ゲーム、インターネット、モバイルのアニメーションまで、様々な拡張を見せています。CGソフトウェアや制作機器など、その表現手法やテクニックもめざましい多様化と進化を見せ、出口となるメディアまでもがたくさんの選択肢を持つ現在において映像研究科アニメーション専攻はその研究、制作および情報、人脈の世界的な「核」となることをめざしています。また、次世代に向けて新しいステップを踏み出すべき日本のアニメーション界において、それを導いていくリーダーを育成していくことをめざしています。

そのために、当専攻では、世界的、歴史的視野に立つて、アニメーションを歴史的な文化的背景を持つ映像芸術ととらえ、体系化し、そして批評を確立していく「研究・批評的アプローチ」および、無から新しい概念や表現を生み出し、表現の質を究極まで追求していく「創造的アプローチ」の両方から、2つの研究分野と領域およびカリキュラムを組み立て、展開しています。

博士後期課程

映像メディア学専攻

Film and New Media Studies

映画史や映画理論を中心とした一般的な博士課程とは異なり、東京芸術大学の特質を生かし、「つくる」という知見と経験を重視しながら、新たな「実践的な知」を構築することを目的として、映像メディアにおける言語と文法を研究する博士課程として構想されています。本専攻での研究指導を受ける学生は、修士課程在籍中の創造・研究、あるいは社会での実務経験で獲得した知見や問題意識を基礎に、「映像メディア学」の理論を修得し、実践的かつ水準の高い博士論文の作成を行った者に博士の学位を授与します。

キャンパス

本学のキャンパスは「上野校地」、「取手校地」、「横浜校地」、「千住校地」があります。

取手校地では、美術学部の絵画科(日本画、油画専攻)、彫刻科、工芸科、デザイン科、建築科の各1年次及び先端芸術表現科に対して授業を行っています。

先端芸術表現科は卒業時まで取手校地で授業を行います。

横浜校地では、平成17年度より大学院映像研究科が展開しています。

千住校地では、平成18年度より音楽学部音楽環境創造科が展開しています。

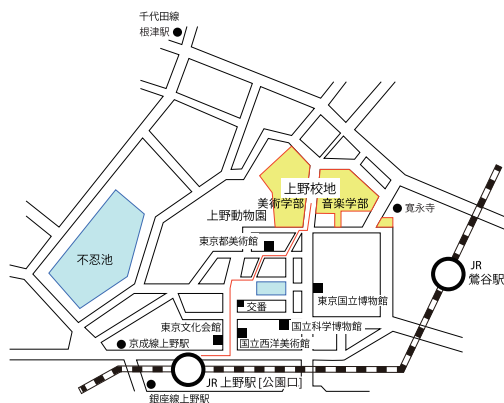
上野校地

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

JR：上野駅(公園口)・鶯谷駅下車 徒歩10分

東京メトロ：銀座線・日比谷線上野駅下車 徒歩15分、千代田線根津駅下車 徒歩10分

京成電鉄：京成上野駅下車 徒歩15分



横浜校地

馬車道校舎 〒231-0005 神奈川県横浜市中区本町4-44

横浜高速鉄道 みなとみらい線 馬車道駅下車すぐ

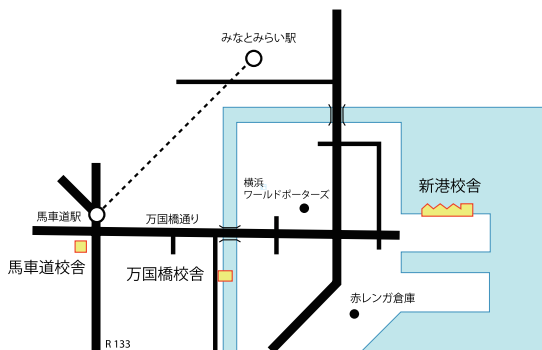
新港校舎 〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-5-1

横浜高速鉄道 みなとみらい線 みなとみらい駅または馬車道駅下車 徒歩15分

万国橋校舎 〒231-0002 神奈川県横浜市中区海岸通4-23

万国橋会議センター 3F

横浜高速鉄道 みなとみらい線 馬車道駅下車 徒歩5分

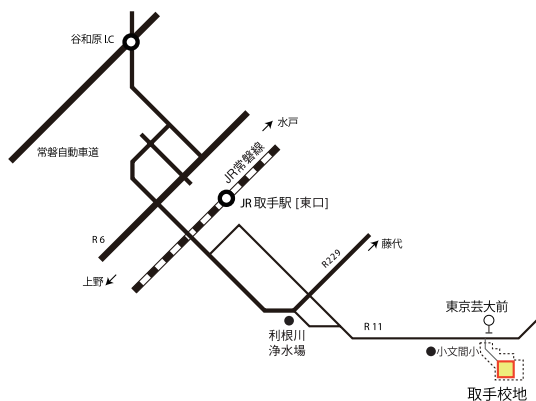


取手校地

〒302-0001 茨城県取手市小文間5000

JR 常磐線・取手駅(※)東口から大利根交通バスで約15分(約5.9km)「東京芸大前」下車

※上野駅から約40分



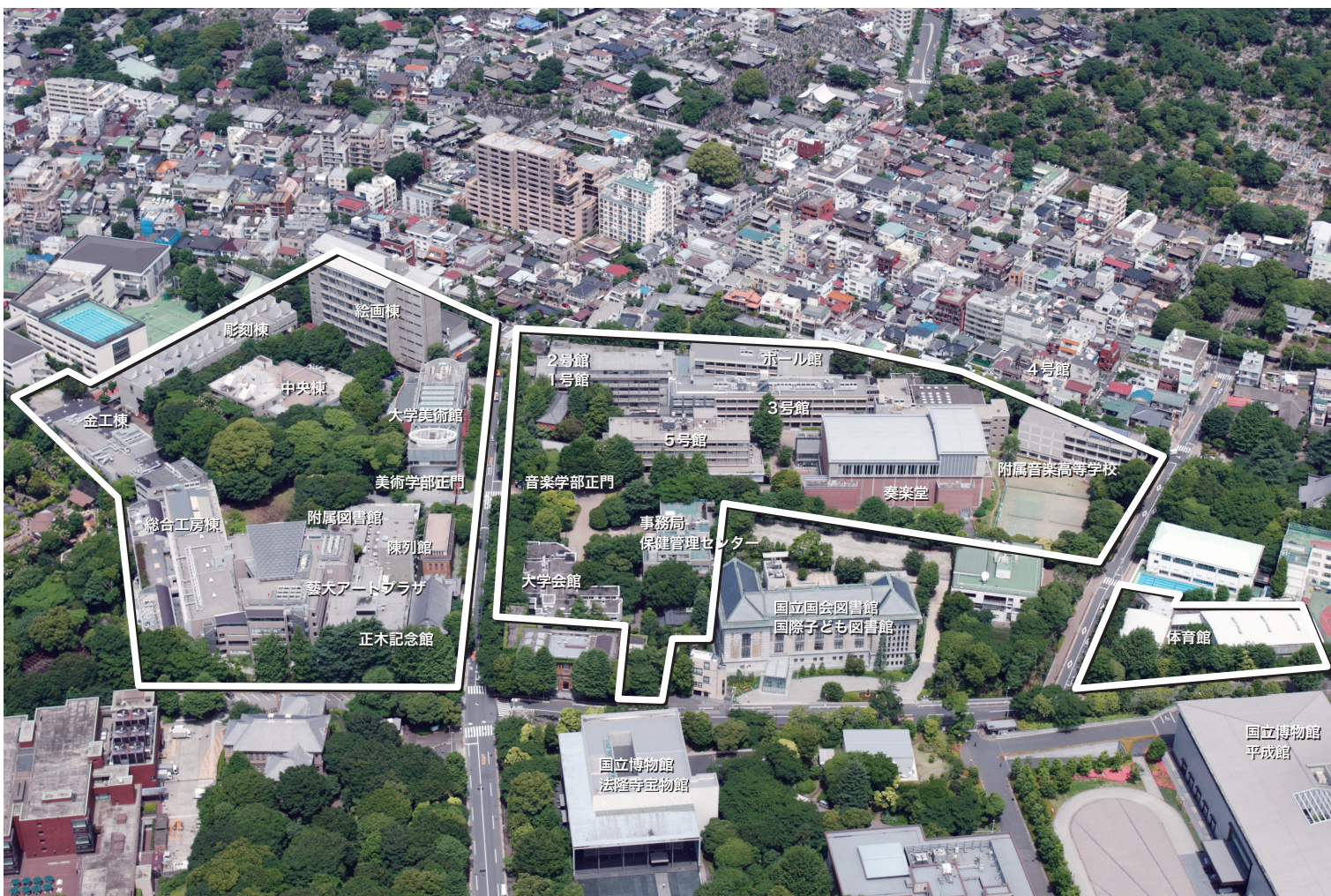
千住校地

〒120-0034 東京都足立区千住1-25-1

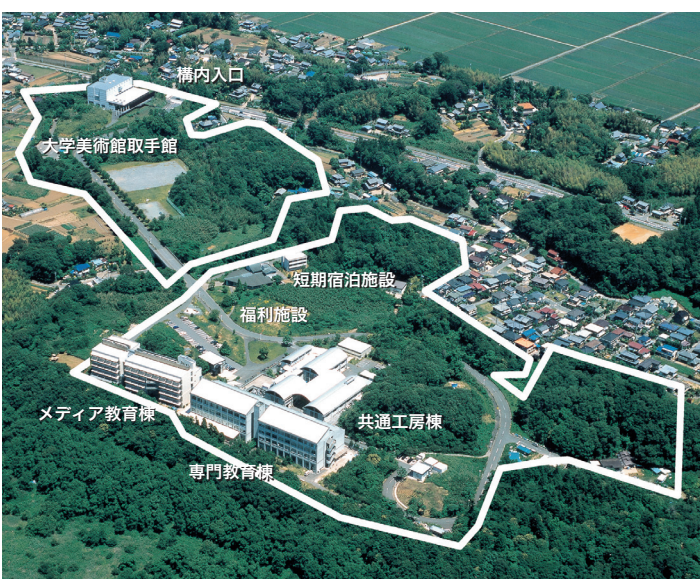
JR / 東京メトロ 千代田線・日比谷線 / 東武鉄道 東武伊勢崎線 / 首都圏新都市鉄道 つくばエクスプレス

北千住駅(西口)下車 徒歩約5分





上野校地



取手校地



横浜校地（馬車道校舎）



横浜校地（万国橋校舎）



横浜校地（新港校舎）



千住校地

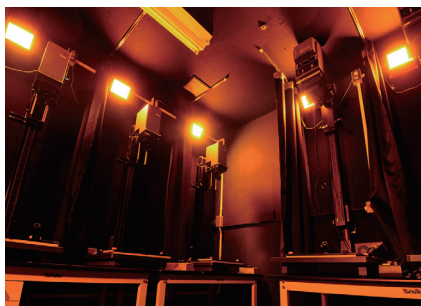
組織・施設

附属古美術研究施設(美術学部)



美術教育の重要な分野として古美術研究があります。そのため、美術学部における教育実習施設として附属古美術研究施設が奈良市内に置かれ、奈良、京都を中心に存在する飛鳥以降の各時代の建築物、絵画、彫刻、工芸品等日本古来の優れた作品の研究を行い、カリキュラムの一環として実施される古美術研究旅行や、教職員、学生の古美術研究及び実習に利用されています。

附属写真センター(美術学部)



写真、映像施設等の利用を通じて、芸術に関する教育、研究効果の増大を図ることを目的として昭和51年に開設されました。共同利用施設として諸設備を利用するための初心者講習会を行い、また各科の写真集中講義や「写真表現演習Ⅱ」、「写真映像論」、「現代写真論」、「写真史」などの開設授業を担当しています。ジャンルを自在に横断するさまざまな芸術表現が増えている現実をふまえ、従来の枠組みを超えた、より総合的な表現としての在り方を研究しています。暗室やスタジオ、デジタル機器、大型プリンター等、小規模ながらも小回りの利く設備や機材の充実に努めています。

管弦楽研究部(音楽学部)



管弦楽研究部(藝大フィルハーモニア)は、東京芸術大学に所属するプロフェッショナル・オーケストラです。

主な活動としては、毎年春と秋に開かれる定期演奏会、声楽科との合唱付オーケストラ作品の演奏、オペラ研究部との共演、年度始めの新卒業生(各科最優秀者)紹介演奏があります。その他、年末には恒例のメサイア演奏会、第九公演などを行っています。

教育面では、器楽科、声楽科学生との協奏曲等の共演および作曲科学生の作品演奏(モーニングコンサート)、指揮科学生による演奏会・試験・演習など、学生の演奏経験の拡充に資しています。さらに各地の音楽文化向上のための出張演奏も行っています。

オペラ研究部(音楽学部)

2013年 第59回オペラ定期公演「秘密の結婚」



Photo by TAKE-O

オペラ研究部は、歌手をはじめ指揮・演出・演技指導・ピアノ(コレペティートル)・衣裳デザイン・舞台監督など専門の研究部員によって構成されています。声楽科と共同で大学院音楽研究科学生(オペラ専攻修士・博士課程)と学部生の教育にあたり、独自の研究活動に加えて教育の一環として毎年本学奏楽堂においてオペラ定期公演等を行っています。また、昨年より文化庁支援の『大学を活用した文化芸術推進事業』にも取り組み、昨年に続き新国立劇場での公演を予定しています。

音楽研究センター(音楽学部)



音楽研究センターは、音楽学部において、開架閲覧室、試聴室、音響研究室、研究推進室で構成されています。

□開架閲覧室・試聴室

音楽の専門書、参考図書をはじめ、楽譜、マイクロフィルム、レコード、CDなどを所蔵し、レポートや卒業論文、修士、博士論文などの作成に、また個人の研究に利用できる本学学生・教員の研究施設です。

インターネットスペース、個人学習ブース、グループ学習室が設置されています。

試聴室では個人の研究のために録音資料、大学の定期演奏会記録を聴くことができます。

音楽文庫室では寄贈貴重文庫の整理が進行中です。

□音響研究室

室内音響や電子音響の研究、録音・録画方法の研究、楽器や音声の音色・ピッチに関する研究などを行う施設です。録音スタジオ、音響実験室、楽器研究室、AV実習室、内外の音響学会誌を揃えたゼミ室が付設されており、前述の研究の場として利用されています。

□研究推進室(リサーチセンター)

大学院音楽研究科の研究活動を推進支援するところです。修士・博士研究を進める上で必要なスキルや知識を学ぶための授業・ワークショップ・個人サポートなどを行っています。また、創造的な芸術活動を実践する上で必要な芸術研究のあり方を国内外にわたって広く調査し、21世紀の音楽文化状況に対応した研究の推進に努めています。

附属図書館



上：上野校地図書館本館閲覧室
下：取手校地図書館分室閲覧室

上野キャンパスにある本館は正面玄関の張り出した庇が特徴的な建物で、窓外の緑に囲まれた閲覧室、AV視聴室などの利用者スペースは二階に集中しています。ここでは大型の美術書やAV資料などを平日の夜間や土曜日でも利用することができます。取手キャンパスには附属図書館分室があり、先端芸術表現科などのニーズに応えています。

附属図書館の収集の歴史は、明治12年の音楽取調掛、明治18年の図画取調掛、明治20年の東京音楽学校図書課、東京美術学校文庫、昭和24年の附属図書館発足を経て現在に至っており、蔵書点数は33万点にのぼっています。

中には岡倉天心が美術学校創設期に欧米から持ち帰った美しい洋書群、江戸の金工家後藤家の手控え文書、ルネッサンスの古刊本などの美術書、また、音楽教育黎明期の音楽取調掛資料、歌舞伎狂言本などの邦楽書、作曲家の自筆譜

などの多彩な貴重資料が含まれており、学外の利用者にも幅広く利用されています。これらの貴重資料は、毎年行っている貴重資料展やWebデータベース¹⁾で広く公開されています。

図書館のホームページ²⁾からはWebOPAC(蔵書検索)だけでなく、電子ジャーナル、文献データベース、音源ライブラリーへのアクセスや、教員著作アーカイブ、博士論文、紀要論文などの情報も提供しています。

附属図書館では今後も図書、楽譜、雑誌はもちろん、展覧会カタログや映像・録音資料などを積極的に収集しコレクションの充実を図るとともに、本学の研究成果や芸術情報を発信し、本学における芸術情報発信のセンターとしての役割を果たしてゆきます。

1) 貴重資料画像データベース <http://images.lib.geidai.ac.jp/>

2) 附属図書館ホームページ <http://www.lib.geidai.ac.jp/>

大学美術館



本学の芸術資料収集は、東京美術学校設置(明治20年)以前の図画取調掛の時代以来まで遡り、芸術教育と研究のため120年以上にわたって現在まで継続されています。

本館所蔵品は、32件の指定文化財を含む約28,700件(台帳登録件数)に及び、その内容は、絵画・彫刻・工芸品を始め、音楽資料、写

真、考古遺物など極めて多岐にわたっています。とりわけ、開学以来収集を進めてきた平常・卒業・修了制作や自画像といった学生制作品は、今日では我が国の近現代美術についての重要なコレクションを形成しています。

これらの芸術資料は、明治以来、当時は文庫と呼ばれた図書館内に収められ、戦後は、

附属図書館の管理のもと教育研究のために学内外に利活用されてきました。昭和45年には附属図書館から独立し、学内共同教育研究施設「芸術資料館」として設置されました。その後、芸術資料の教育研究と利用を一層活発に進め、研究の成果を積極的に社会に対して公開することが強く求められるようになり、新しい美術館活動の展開を目指して、研究組織の整備充実を図り、平成10年4月に芸術資料館を転換し「大学美術館」を設置しました。

大学美術館は、学芸企画、美術情報、保存修復及び制作展示の4研究室を構成し、美術館及び本学の教育研究活動を一層推進するもので、これは実技系芸術大学として通常の実験的な大学美術館を目指しています。

大学美術館は、上野校地の新館(平成11年建設)、陳列館(昭和4年建設)、正木記念館(昭和10年建設)及び取手校地の取手館(平成6年建設)を有しています。

組織・施設

社会連携センター



大学には教育研究活動を行うこと以外に、社会全体の発展への寄与が期待されています。本学も展覧会、演奏会、公開講座等、市民が芸術に親しむ機会を提供していますが、これ以外にも公的機関の審議会等への教員の参加、作品の制作や展示、環境、空間、商品等のデザイン、また文化財の保存修復やソロからオーケストラに至る演奏など、さまざまな依頼や相談があります。社会連携センターは、こうした学外からの要請を受け止め、大学の関係情報の提供や調整を行う総合窓口として平成19年4月に設置されました。

さらにセンターでは、「藝大アーツ イン 東京丸の内」のように、積極的に地域社会、産業界、経済界と連携しながら本学の人的、芸術的資源を活かした事業をプロデュースすることにより、日本の文化芸術の振興に寄与するための活動を行っています。

言語・音声トレーニングセンター



言語・音声トレーニングセンターは外国語の教育や舞台語の発音・発声指導を行うために、昭和50年4月に設置された学内共同教育研究施設です。言語教育を専門とする外国人・日本人教員が、主に次の3つの活動を行っています。

- 1) 英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語科目を開設し、学生の外国語運用能力を高める。
- 2) 声楽・オペラ・邦楽など、舞台で使われる言語の正しい発音・リズムを指導する。
- 3) 外国語教育や発声・発音指導を効果的に行うための基礎研究を遂行する。

また、各種外国語の学習に役立つ教材を所有しており、本学学生は自由に利用することができます。

総合芸術アーカイブセンター



総合芸術アーカイブセンターは、本学及び関連機関が所蔵する、歴史的に重要な芸術資料（美術・音楽・映像作品や文書史料等）を、デジタル技術をもって保存し、様々な形で活用していく方法を研究するために2011年に設立されました。本センターで扱う資料には、文化財を含む芸術品や、本学で行われた演奏会の録音・録画データなどがあり、現在は次の4つのプロジェクトに分かれて分野を超えた連携をとり研究を進めています。

- 1) 3Dデータ研究
- 2) 音響・映像データ研究
- 3) 大学史文書史料研究
- 4) 情報システム研究

また、本学の故小泉文夫教授が世界数十カ国の現地調査で収集した諸民族の楽器・書籍・楽譜・録音録画資料を閲覧できる小泉文夫記念資料室や、本学の歴史に関わる各種史料を所蔵する大学史史料室も、本センターの一部です。

芸術情報センター



左上：ラボ
左下：ラウンジ
中上：スタジオ



芸術情報センターは、「セキュリティの向上」「オープンネスの推進」「情報発信のリテラシー」を運営方針に掲げ、学内共同利用施設として上野・取手・横浜・千住・奈良を結んだキャンパス情報ネットワーク（学内 LAN = Acanthus）の管理運用、情報メディアに関連する講義演習や情報発信のサポート等を日常

業務として行なっています。また、学内の様々な活動の情報化推進に向けて、各部署と連動し、クラウド化やアーカイブ化の実現等を推進しています。

その他、メディア・リテラシー（情報の読み書き能力）を身につけてもらえるような授業やプロジェクト、ワークショップの展開を行なっています。

特色としては、コンピュータと表現に関する様々な講義を行うための「コンピュータ演習室」、創作支援を目的として、美術（デジタルファブリケーション環境）・音楽（サウンドスタジオ）・映像（HD映像編集環境）各分野に特化したコンピュータと周辺機器を設置し、高度な創作活動を行う「ラボ」を有しています。設備、利用に関してはWebサイトを参照して下さい。

演奏藝術センター

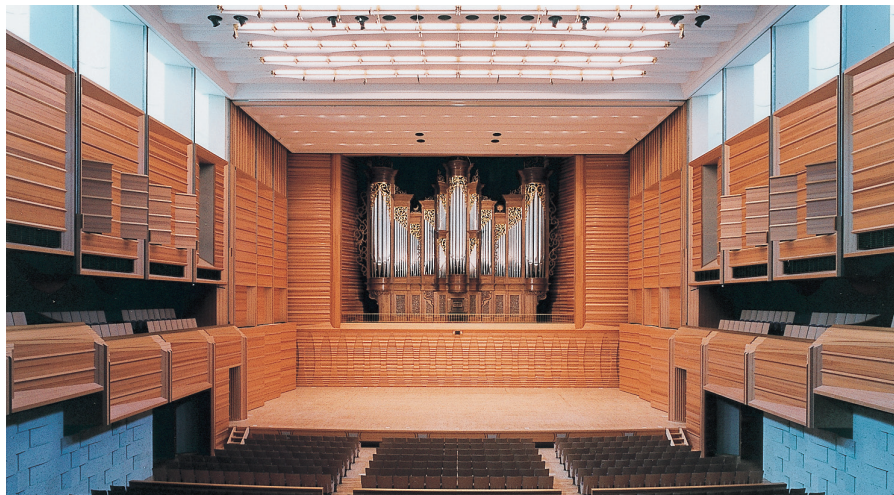


演奏藝術センターは、奏楽堂を舞台に、美術学部・音楽学部の枠を越えて、演奏および音楽的舞台芸術の創造的な「場」をプロデュースするために、平成9年4月に新設された機関で、平成16年度より以下の3つの柱を立てて活動しています。

- 1 音楽学部各講座の枠を越えたインタラクティブな《藝大の響き》
- 2 音楽学部各講座の独自性にモチベーションを置いた《奏楽堂シリーズ》
- 3 広いパースペクティブで音楽芸術の「過去」「現在」「未来」を見据える《藝大21》

いずれの企画でも、社会に向かって開かれた意欲的な公演を行うことを目指しています。

奏楽堂



明治23年(1890)以来、音楽教育の練習、発表の場として永く使用されてきた旧東京音楽学校奏楽堂は、建物の老朽化が進み、また、音楽の演奏形態の拡大等に対応できなくなってきたため、昭和59年(1984)に解体され、その後、上野公園内に台東区の建造物として移築再建されました。

東京藝術大学奏楽堂は、旧奏楽堂に替わる本学のコンサートホールとして平成10年3月に新しく建設されました。

奏楽堂の設計にあたっては、芸術音楽の教育および研究の場としての機能、音響効果、設備を重視し、周囲の環境と調和する格調の高いものとなるよう配慮しました。ホール全体がひとつの優れた楽器であるかのように、調和のとれた響きを生むものとして考え、音響特性を使用目的に応じて変えられるよう、世界で初めて、客席の天井全体を可動式にして、音響空間を変化させる方法を採用しています。

那須高原研修施設



那須高原研修施設は、本学の学生・職員、本学音楽学部附属音楽高等学校生徒の教育・研修及び課外活動等のために使用することを目的として昭和57年8月に設置されました。

施設は定員30名で、宿泊室のほか、多目的に利用できるアトリエ兼研修室、音楽ホール兼大食堂及び図書資料室が設置されています。

国際交流会館



国際交流会館は、外国人留学生と外国人研究者に居住の場を提供し、併せて教育研究上の国際交流に寄与することを目的として平成8年3月に設置されました。

会館は、JR常磐線新松戸駅より徒歩20分又は、JR武蔵野線、首都圏新都市鉄道(つくばエクスプレス)南流山駅より徒歩8分、鉄筋コンクリート造り3階建(建物延面積1,592m²)で、管理施設、居住施設及び共用施設で構成されています。

利根川荘



利根川荘は、教員、学生、職員が取手校地における正課及び課外活動その他の教育活動を遂行するため、短期の宿泊に利用することを目的として平成5年7月に設置されました。

■ 入学料

入学料 282,000円(予定額)
入学手続きを行う際に、入学手続きに必要な書類に添えて納付します。

入学料免除 入学前1年以内において、本人の学資を主として負担している者が、死亡し、又は本人若しくは本人の学資を主として負担している者が風水害等の災害を受けた場合又はこれに準ずる場合であって、学長が相当と認める事由により入学料の納付が著しく困難であると認められる者に対して、願い出により選考のうえ、入学料の全額又は半額が免除される制度があります。

入学料徴収猶予 経済的理由により入学料の納付期限までに入学料の納付が困難で、かつ学業優秀と認められる者及び入学前1年以内に、出願者の主たる家計支持者の死亡又は出願者本人若しくは出願者の主たる家計支持者が風水害等の災害を受けたことにより、入学料の納付期限までに入学料の納付が困難であると認められる者に対して、願い出により選考のうえ、入学料の納付を入学年度の9月末日まで猶予する制度があります。

■ 授業料

授業料 年額: 535,800円(予定額)
前期(4月)と後期(10月)の2期に分けて、納付します。希望により前期分の納付の際に後期分も併せて納付することができます。
(在学中に授業料改定が行われた場合には改定時から新授業料が適用されます。)

授業料免除 経済的理由により授業料の納付が著しく困難であり、かつ学業優秀と認められる者及び学生の学資を主として負担している者が死亡又は風水害等の災害を受け、授業料の納付が著しく困難であると認められる者に、本人からの各期(前期・後期)ごとの願い出により選考のうえ、授業料の全額又は半額が免除される制度があります。

授業料徴収猶予 経済的理由により授業料の納付期限までに授業料の納付が困難で、かつ学業優秀と認められる者に対して、願い出により選考のうえ、授業料の納付について、延納又は月割分納が許可される制度があります。

■ その他経費(入学当初経費: 予定)

美術学部

学生教育研究災害傷害保険(4年分)	3,300円
学研災付帯賠償責任保険(4年分)	1,360円
古美術研究旅行積立金	90,000円
厚生補助助成金	30,000円
同窓会費(入会費及び10年間分会費)	40,000円
教材費等	
日本画(写生旅行代を含む)	約160,000円
油画(写生旅行代を含む)	150,000円
彫刻	約290,000円
工芸	180,000円
デザイン	250,000円
建築	160,000円
先端芸術表現	200,000円
芸術学	33,000円

音楽学部

学生教育研究災害傷害保険(4年分)	3,300円 (別料1,750円)
学研災付帯賠償責任保険(4年分)	1,360円 (別料680円)
音楽教育振興会費	60,000円
同窓会費(入会費及び終身会費)	60,000円

■ 奨学制度(日本学生支援機構)

<http://www.jasso.go.jp/>

人物、学業ともに優秀かつ健康であって、学資の支弁が困難と認められる者に対して、日本学生支援機構の奨学金が貸与される制度があります。

奨学金は、「第1種」(利息なし)と「第2種」(返還時に有利子。年3%を限度とした「固定利率」と「変動利率」が選択できます。の2種類があります。また、入学時特別増額貸与制度もあります。

(大学奨学生)貸与額は下記の月額から選択

第1種奨学金 (無利息)	自宅通学	月額 30,000円 月額 45,000円
	自宅外通学	月額 30,000円 月額 51,000円
第2種奨学金 (有利息)	自宅通学 自宅外通学 共通	月額 30,000円
		月額 50,000円
		月額 80,000円
		月額 100,000円 月額 120,000円

■ その他の奨学金

日本学生支援機構の他に、地方公共団体や民間の各種法人等による育英制度も扱っています。

また、個人又は団体等から本学へ寄付された基金等をもとに、学業優秀な学生又は研究室等に学資等を給付している「東京芸術大学奨学金」の制度もあります。

■保健管理センター

本学の学生および教職員の保健管理に関する専門的業務を行い、学生および教職員の心身の健康の保持増進を図ることを目的として、以下の業務を行っています。

- 1) 保健管理の企画及び立案に関すること。
- 2) 定期および臨時の健康診断並びにその事後措置に関すること。
- 3) 健康相談および応急処置に関すること。
- 4) 精神衛生に関する指導、助言に関すること。
- 5) カウンセリングに関すること。
- 6) 学内の環境衛生および伝染病の予防についての指導に関すること。
- 7) 保健管理の充実向上のための調査、研究に関すること。
- 8) その他、健康の保持、増進について必要な専門的業務に関すること。

■学生寮

長年親しまれてきた学生寮「石神井寮」が老朽化のため平成26年3月に閉寮となり、平成26年4月に新学生寮がオープンすることとなりました。

新しい学生寮「東京藝術大学藝心寮」は、各キャンパスへのアクセスに優れた足立区東和3丁目に建設され、最寄り駅はJR亀有駅、もしくは東京メトロ千代田線北綾瀬駅となります。

建物は鉄筋コンクリート構造9階建て、部屋数は300室、部屋タイプは通常のワンルームタイプのほか、防音室完備のタイプも用意されています。また、アトリエや音楽練習室も用意されており、本学学生の制作や演奏などの芸術創造活動を支援します。

- 設置：平成26年4月
- 定員：男性 Aタイプ117室、Bタイプ9室
女性 Aタイプ163室、Bタイプ11室
- 住所：足立区東和3丁目12番30号

JR常磐線「亀有駅」徒歩約15分

東京メトロ千代田線「北綾瀬駅」徒歩約16分

■下宿・アルバイト紹介

学生支援課、取手校地務室、千住校地務室、大学院映像研究科事務室では、下宿、アルバイトの紹介をしています。

特に、アルバイトを希望する場合は、日常の勉学のさまたげとならないよう気をつけることが大切です。

新入生は、大学生活に慣れることもあり1年前期は控えるよう心掛けてください。

■課外活動

本学では、正課の授業のほかにそれぞれの学生がもっている個性・趣味・特技に従って自主的に創造力を発揮し、様々な体験を通じて心身ともに健康で幅広い視野を育成し、情操豊かな学生となるために文化・体育・レクリエーション等の各方面に活発な課外活動が行われています。

主な活動としては、学園祭(藝祭)が毎年9月上旬に開催され、平素の自主的研究・課外活動の成果を広く一般に公開しています。

また、他大学との連合行事として、五芸祭(東京芸術大学・京都市立芸術大学・金沢美術工芸大学・愛知県立芸術大学・沖縄県立芸術大学の芸術系5大学による体育・文化交歓会)や東京地区国立大学体育大会等が行われており、多大な成果を収めています。課外活動の施設として、大学会館、体育館、テニスコート、サークル部室等があり、それぞれの活動に必要な物品等が備えてあります。

なお、学生団体として、美術学部には自治会、音楽学部には学友会があり、学生の自治により学生相互の親睦と学生生活全般の向上を目指して活動しています。

■主な福利施設

大学会館

大学会館は、鉄筋2階建て(地階は、学生サークル共用室)で、学生及び教職員の福利厚生を図るための総合施設です。

館内には、学内関係者の日常一般的な利用に供するため、食堂、喫茶室、売店等が設置されています。

また、学生、教職員の共用施設として、グループの集会、展示会や各種催物に使用できる集会室、和室、展示室、娯楽室等があり、広く利用されています。

その他施設

美術学部構内 (大学美術館内)	大浦食堂	和洋食、丼物、うどん、喫茶、弁当、パン等
	レストランオークラ	洋食、カレーライス、ワイン、ケーキ、喫茶等
	芸大生協売店 (美校店)	書籍、楽譜、画材、文房具、日用雑貨、弁当、菓子類、プレイガイド、DPE、旅行、宅配等
	画翠	画材、文房具
音楽学部構内 (大学会館内)	ミュージアムショップ	ミュージアムグッズ、図録等
	キャッスル食堂	洋食、麺類、喫茶等
	芸大生協売店(音校店)	弁当、菓子、日用雑貨、文房具、化粧品等
取手校地構内 (福利施設内)	芸大生協食堂	定食類、丼物、うどん、そば、カレーライス
	芸大生協売店 (取手店)	書籍、画材、文房具、日用雑貨、パン、弁当、菓子類等

資格取得・進路

資格取得

■ 学位

美術学部	音楽学部
学士(美術)	学士(音楽)

■ 学芸員

博物館や美術館などには、博物館法に基づき資料の収集、保管、展示及び調査研究などに関する専門的職務を行う者として学芸員が置かれています。

美術学部では、この学芸員となる資格を得るための課程を開設しており、資格取得には、卒業に要する単位のほかに、博物館法施行規則に定める博物館に関する科目の単位を取得しなければなりません。

■ 教育職員免許状

教育職員免許状の取得を希望する者は、卒業に要する単位のほかに、所定の教職科目を履修し、授与願を大学又は教育委員会に申請すれば、次の資格が得られます。

美術学部

中学校「美術」一種免許状
高等学校「美術」・「工芸」一種免許状
※ 取得率：38.4%

音楽学部

中学校「音楽」一種免許状
高等学校「音楽」一種免許状
※ 取得率：50.4%

進路

■ 美術学部

卒業後は、それぞれの分野において、作家活動を志し第一線で活躍する者。高等学校・中学校教員や予備校・文化講座講師等教育関係に進む者。美術に直接・間接に関連のあるデザイナー、建築事務所、放送、出版編集、情報宣伝関係企業や美術館、博物館等に進む者。また多くの者はさらに研究を深めるため大学院に進みます。

□ 大学院等進学・留学：41.7%

□ 平成25年度卒業生の主な就職先

※ 常勤及び正社員のみ記載

ポリフォニー・デジタル
大都技研
ミキモト
サクマ製菓
電通
コクヨ
河淳
コナミデジタルエンタテインメント
ライティングプランナーズアソシエーツ
テレコムスタッフ
スタジオよんどしい
アッシュ・ペー・フランス
昭栄美術
電通ヤング・アンド・ルビウム

■ 音楽学部

卒業後は、オーケストラ奏者・室内合奏者・独奏者として、また作曲家、声楽家等として国内外で活躍する者。教員、音楽教育、音楽ジャーナリズムなどの音楽専門知識や、放送、新聞、出版などのマスコミ、音楽マネジメント関係に進む者。またさらに研究を深めるため大学院に進む者などがいます。

□ 大学院等進学・留学：32.9%

□ 平成25年度卒業生の主な就職先

※ 常勤及び正社員のみ記載

NHK 文化センター川越教室
NHK エンタープライズ
サイトウ・キネン・フェスティバル松本
アーツポート
レコチェク
ギミック
エフエム東京
富士総研
1991
博報堂プロダクツ

国際交流

大学間交流協定

学術資料の相互交換、学生及び教員の交流並びに共同研究などを行うことを目的として、海外の教育研究機関と国際交流協定を結んでいます。

■ 大学間交流協定締結一覧(19ヵ国/地域 54大学/機関)

アメリカ	スミソニアン研究所フリーア美術館／サックラー美術館、シカゴ美術館附属美術大学
イギリス	英国王立音楽院、王立北部音楽院、ユニバーシティ・フォー・ザ・クリエイティブ・アーツ、ロンドン芸術大学、ロイヤルアカデミースクールズ、グラスゴー美術大学
イタリア	ミラノ工科大学、トリノ工科大学
ウズベキスタン	ウズベキスタン国立音楽院
オーストラリア	RMIT大学(旧王立メルボルン工科大学)、シドニー大学、グリフィス大学
オーストリア	ウィーン音楽演劇大学、ウィーン工科大学、ウィーン応用芸術大学、ウィーン美術アカデミー
韓国	ソウル大学校美術大学、ソウル大学校音楽大学、韓国芸術総合学校、大邱大学校、韓国映画アカデミー、韓国傳統文化學校
台湾	国立台南芸術大学、国立台湾芸術大学、国立台北芸術大学
シンガポール	ラサール芸術大学
スペイン	カタルーニャ工科大学バルセロナ建築学部
中国	中央美術学院、中央音楽学院、清華大学美術学院、上海音楽学院、中国美術学院、新疆芸術学院、陝西師範大学音楽学院、敦煌研究院
ドイツ	ミュンヘン音楽演劇大学、シュトゥットガルト音楽演劇大学、ワイマール・パウハウス大学、ハレ・ブルグ・ギービヒェンシュタイン芸術大学、シュトゥットガルト美術大学
トルコ	アナドール大学、ミマル・シナン美術大学
フィンランド	シベリウス音楽院、アアルト大学
フランス	パリ国立高等音楽舞踊院、パリ国立高等美術学校、ナント芸術大学、エコール・ブール国立工芸学校
スイス	ジュネーヴ音楽大学
ポーランド	プロツワフ美術大学
リヒテンシュタイン	リヒテンシュタイン国立大学
イスラエル	ベツァエル美術デザインアカデミー
タイ	シラパコーン大学

外国人留学生

■ 国費・私費留学生別一覧

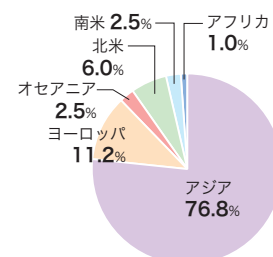
平成26年5月1日現在

	美術学部	大学院 美術研究科			音楽学部			大学院 音楽研究科			大学院 映像研究科			合 計	男	女
		修士	博士	研究生	学部	別科		修士	博士	研究生	修士	博士	研究生			
国費留学生	0	5	8	4	0	0		4	3	1	1	0	1	27	11	16
私費留学生	5	23	14	9	3	1		13	3	4	11	1	2	89	38	51
合 計	5	28	22	13	3	1		17	6	5	12	1	3	116	49	67

■ 国別留学生数

韓国	35名	ラオス	1名
中国	35名	イラン	1名
台湾	13名	バングラデシュ	1名
アメリカ	7名	ミャンマー	1名
イギリス	4名	ウクライナ	1名
オーストラリア	3名	スペイン	2名
セルビア	2名	ベトナム	1名
オランダ	1名	オーストリア	1名
ブラジル	1名	ベルギー	1名
ウガンダ	1名	タイ	1名
ベネズエラ	1名	アルゼンチン	1名
ロシア	1名		

■ 地域別留学生割合



入試情報

学部入試状況(過去3年)

			平成24年度						平成25年度						平成26年度					
			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
美術学部	絵画科	日本画	25	⁽¹⁾ 513	⁽¹⁾ 503	25	25	20.5	25	514	504	25	25	20.6	25	⁽²⁾ 483	⁽²⁾ 475	27	27	19.3
		油画	55	⁽²⁾ 1,169	⁽²⁾ 1,145	55	55	21.3	55	⁽⁶⁾ 1,097	⁽⁶⁾ 1,087	⁽¹⁾ 54	⁽¹⁾ 54	19.9	55	⁽⁶⁾ 1,070	⁽⁵⁾ 1,057	59	59	19.5
		小計	80	⁽³⁾ 1,682	⁽³⁾ 1,648	80	80	21.0	80	⁽⁶⁾ 1,611	⁽⁶⁾ 1,591	⁽¹⁾ 79	⁽¹⁾ 79	20.1	80	⁽⁸⁾ 1,553	⁽⁷⁾ 1,532	86	86	19.4
	彫刻科		20	239	235	20	20	12.0	20	244	239	20	20	12.2	20	203	199	22	22	10.2
	工芸科		30	256	250	30	30	8.5	30	⁽¹⁾ 260	⁽¹⁾ 257	30	30	8.7	30	238	238	33	33	7.9
	デザイン科		45	⁽⁴⁾ 758	⁽³⁾ 740	46	45	16.8	45	⁽⁶⁾ 810	⁽⁵⁾ 789	45	45	18.0	45	⁽³⁾ 738	⁽³⁾ 715	⁽¹⁾ 48	⁽¹⁾ 48	16.4
	建築科		15	⁽¹¹⁾ 48	⁽¹⁰⁾ 47	15	15	3.2	15	⁽³⁾ 54	⁽²⁾ 50	15	15	3.6	15	⁽³⁾ 69	⁽³⁾ 69	16	16	4.6
	先端芸術表現科		30	⁽⁴⁾ 152	⁽⁴⁾ 148	⁽¹⁾ 29	⁽¹⁾ 29	5.1	30	⁽²⁾ 121	⁽²⁾ 116	31	30	3.9	30	⁽¹⁾ 91	⁽¹⁾ 85	⁽¹⁾ 29	⁽¹⁾ 29	3.0
	芸術学科		20	⁽³⁾ 76	⁽³⁾ 71	20	20	3.8	20	⁽¹⁾ 85	74	22	20	4.3	20	⁽¹⁾ 74	⁽¹⁾ 67	⁽¹⁾ 21	⁽¹⁾ 19	3.7
	合計		240	⁽²⁵⁾ 3,211	⁽²³⁾ 3,139	240	⁽¹⁾ 239	13.4	240	⁽¹⁹⁾ 3,185	⁽¹⁶⁾ 3,116	⁽¹⁾ 242	⁽¹⁾ 239	13.3	240	⁽¹⁶⁾ 2,966	⁽¹⁵⁾ 2,905	⁽³⁾ 255	⁽³⁾ 253	12.4
音楽学部	作曲科		15	52	47	15	15	3.5	15	40	39	15	15	2.7	15	43	42	15	15	2.9
	声楽科		54	⁽²⁾ 243	⁽²⁾ 241	55	54	4.5	54	233	232	54	54	4.3	54	248	247	54	54	4.6
	器楽科		98	477	471	103	103	4.9	98	497	490	106	106	5.1	98	453	447	106	106	4.6
	指揮科		2	10	9	3	2	5.0	2	7	7	2	2	3.5	2	5	5	1	1	2.5
	邦楽科		25	⁽¹⁾ 34	⁽¹⁾ 34	25	25	1.4	25	27	27	25	25	1.1	25	17	17	17	17	0.7
	楽理科		23	51	51	23	23	2.2	23	53	53	24	23	2.3	23	43	43	24	23	1.9
	音楽環境創造科		20	⁽⁵⁾ 103	⁽⁵⁾ 101	20	20	5.2	20	⁽⁴⁾ 112	⁽⁴⁾ 109	21	21	5.6	20	⁽⁴⁾ 100	⁽⁴⁾ 97	⁽¹⁾ 20	⁽¹⁾ 20	5.0
	合計		237	⁽⁸⁾ 970	⁽⁸⁾ 954	244	242	4.1	237	⁽⁴⁾ 969	⁽⁴⁾ 957	247	246	4.1	237	⁽⁴⁾ 909	⁽⁴⁾ 898	⁽¹⁾ 237	⁽¹⁾ 236	3.8
総合計			477	⁽³³⁾ 4,181	⁽³¹⁾ 4,093	483	⁽¹⁾ 481	8.8	477	⁽²³⁾ 4,154	⁽²⁰⁾ 4,073	489	⁽¹⁾ 485	8.7	477	⁽²⁰⁾ 3,875	⁽¹⁹⁾ 3,803	⁽⁴⁾ 492	⁽⁴⁾ 489	8.1

※美術学部先端芸術表現科には、帰国子女入試結果を含む
合格者数には追加合格者数を含む

大学院入試状況(修士課程)

		平成26年度						
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	
美術研究科	絵画	47	(12) 149	(12) 143	(6) 49	(6) 49	3.2	
	彫刻	15	(2) 27	(2) 26	19	19	1.8	
	工芸	28	(6) 37	(3) 35	32	32	1.3	
	デザイン	30	(27) 61	(27) 61	37	37	2.0	
	建築	16	(4) 72	(4) 54	(3) 16	(3) 16	4.5	
	芸術学	21	(5) 44	(4) 43	24	24	2.1	
	先端芸術表現	24	(6) 90	(5) 83	31	30	3.8	
	文化財保存学	18	(7) 39	(7) 36	(6) 15	(6) 15	2.2	
	合計	199	(69) 519	(64) 481	(15) 223	(15) 222	2.6	
音楽研究科	作曲	7	(3) 14	(3) 10	(1) 3	(1) 3	2.0	
	声楽	20	(1) 145	(1) 145	22	22	7.3	
	器楽	45	(7) 140	(5) 137	(4) 47	(4) 47	3.1	
	指揮	3	0	0	0	0	0.0	
	邦楽	9	(1) 14	(1) 13	(1) 9	(1) 9	1.6	
	音楽文化学	35	(9) 65	(9) 63	(6) 29	(5) 27	1.9	
	合計	119	(21) 378	(19) 368	(12) 110	(11) 108	3.2	
	映像研究科	映画	32	(14) 77	(13) 72	(4) 29	(4) 29	2.4
		メディア映像	16	46	42	16	15	2.9
アニメーション		16	(7) 31	(7) 27	(2) 14	(2) 13	1.9	
合計		64	(21) 154	(20) 141	(6) 59	(6) 57	2.4	
総合計		382	(111) 1,051	(103) 990	(33) 392	(32) 387	2.8	

大学院入試状況(博士後期課程)

			平成26年度					
			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
美術研究科	美術		25	(19) 57	(17) 55	(10) 20	(10) 20	2.3
	文化財保存学		10	(2) 8	(2) 8	(1) 8	(1) 8	0.8
音楽研究科	音楽		25	(8) 48	(7) 48	(2) 20	(2) 20	1.9
映像研究科	映像メディア学		3	(4) 5	(3) 5	1	1	1.7
合計			63	(33) 118	(29) 116	(13) 49	(13) 49	1.9

大学別科入試状況

			平成26年度					
			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
声楽			-	37	37	4	4	-
器楽			-	⁽³⁾ 82	⁽³⁾ 77	⁽¹⁾ 21	⁽¹⁾ 17	-
邦楽			-	⁽¹⁾ 12	12	8	6	-
合計			30	⁽⁴⁾ 131	⁽²⁹⁾ 126	⁽³⁾ 33	⁽¹⁾ 27	4.4

全表共通：
注1)倍率＝志願者数÷募集人員(外国人留学生は含みません)
注2)括弧内の数字は外国人留学生で外数です

平成26年度 美術学部 志願者・入学者詳細

出身高校等所在地

区 分	志願者	入学者
北海道	63	3
東北	68	6
青森県	5	1
岩手県	8	2
宮城県	22	1
秋田県	3	0
山形県	1	0
福島県	29	2
関東	1,921	174
茨城県	76	5
栃木県	43	2
群馬県	48	5
埼玉県	223	21
千葉県	254	25
東京都	896	80
神奈川県	381	36

区 分	志願者	入学者
中部	431	33
新潟県	13	1
富山県	9	0
石川県	6	0
福井県	5	1
山梨県	19	3
長野県	31	0
岐阜県	51	8
静岡県	84	7
愛知県	213	13
近畿	146	12
三重県	41	6
滋賀県	5	1
京都府	13	1
大阪府	33	1
兵庫県	37	2
奈良県	13	1
和歌山県	4	0

区 分	志願者	入学者
中国	72	7
鳥取県	5	0
島根県	4	0
岡山県	15	1
広島県	38	6
山口県	10	0
四国	28	1
徳島県	3	1
香川県	16	0
愛媛県	2	0
高知県	7	0

区 分	志願者	入学者
九州	168	7
福岡県	68	3
佐賀県	14	1
長崎県	26	1
熊本県	20	2
大分県	10	0
宮崎県	12	0
鹿児島県	10	0
沖縄県	8	0

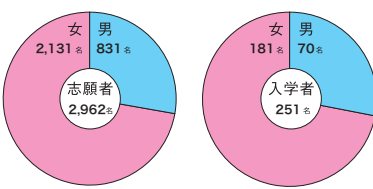
大検等	65	6
-----	----	---

合 計	2,962	251
-----	-------	-----

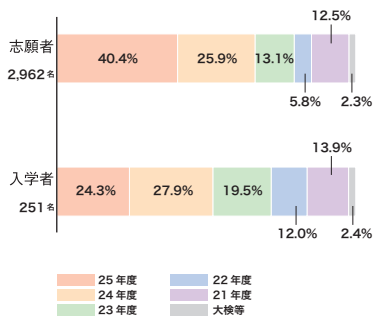
外国	16	3
----	----	---

帰国子女	4	2
------	---	---

男女比率



高校等卒業年度



注1) 外国人留学生、帰国子女入試は外数とし、一般入試のみの数字。

注2) 帰国子女入試は、美術学部先端芸術表現科のみで実施。

平成26年度 音楽学部 志願者・入学者詳細

出身高校等所在地

区 分	志願者	入学者
北海道	14	2
東北	52	15
青森県	6	1
岩手県	7	3
宮城県	23	6
秋田県	2	0
山形県	6	3
福島県	8	2
関東	523	140
茨城県	15	2
栃木県	15	5
群馬県	14	3
埼玉県	61	8
千葉県	61	13
東京都	272	94
神奈川県	85	15

区 分	志願者	入学者
中部	115	29
新潟県	6	2
富山県	7	3
石川県	3	1
福井県	7	1
山梨県	5	0
長野県	15	4
岐阜県	2	0
静岡県	21	3
愛知県	49	15
近畿	85	23
三重県	9	3
滋賀県	3	1
京都府	21	6
大阪府	19	2
兵庫県	29	11
奈良県	4	0
和歌山県	0	0

区 分	志願者	入学者
中国	32	9
鳥取県	2	1
島根県	1	1
岡山県	15	5
広島県	13	2
山口県	1	0
四国	16	4
徳島県	1	0
香川県	13	2
愛媛県	1	1
高知県	1	1

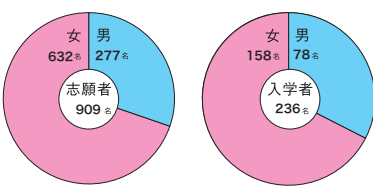
区 分	志願者	入学者
九州	65	14
福岡県	18	2
佐賀県	4	0
長崎県	5	0
熊本県	11	4
大分県	8	1
宮崎県	7	1
鹿児島県	10	6
沖縄県	2	0

大検等	7	0
-----	---	---

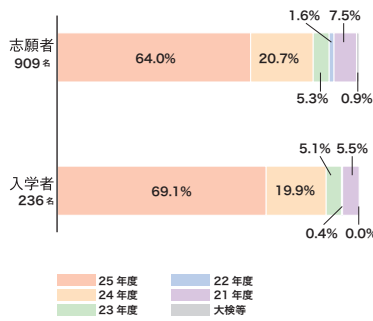
合 計	909	236
-----	-----	-----

外国	4	1
----	---	---

男女比率



高校等卒業年度



注) 外国人留学生は外数とし、一般入試のみの数字。

お問い合わせ

本学への問合せ、手続等については次により行ってください。

■ 学生募集要項等の請求方法(要項代は無料です。)

1：本学ホームページから直接請求する場合

本学のホームページから直接、テレメールによる資料請求ができます。
詳細については本学ホームページ入試案内の「資料請求」(<http://www.geidai.ac.jp/enter/material.html>)をご覧ください。

2：テレメールで請求する場合(インターネット・自動音声応答電話) [大学案内、入学者選抜要項、各学部学生募集要項(美術学部帰国子女入試を除く)]



(1) インターネット(携帯電話、パソコン)または自動音声応答電話をご利用ください。

インターネット(携帯電話、パソコン)の場合

<http://telemail.jp>
携帯電話各社、パソコンとも共通アドレスです。

自動音声応答電話の場合

IP 電話 **050-8601-0101**
IP 電話への一般電話回線からの通話料金は、日本全国どこからでも3分毎に約11円です。

QRコード
対応する携帯電話で読み取れます。

(2) 請求を希望する資料番号(6桁)を入力またはプッシュしてください。

資料名	資料番号
大学案内	562070
入学者選抜要項	582070
入学者選抜要項+大学案内	562050
美術学部募集要項+大学案内	542050
音楽学部募集要項+大学案内	542060

(3) あとは音声ガイダンスに従って登録してください。

※ 受付から2、3日で送付されます。ただし、郵送開始予定日までのご請求は予約受付となり、郵送開始可能になりましたら一斉に郵送します。その日以降は随時発送対象となります。

※ 電話によるご請求の場合、住所・名前の登録時は、ゆっくりはっきりとお話してください。登録された音声が必要不明な場合は到着まで時間がかかる場合があります。

※ 一度ご利用になられた暗証番号(4桁)は必ずひかえておいてください。お問い合わせや送料をお支払いいただく際に必要になります。また、テレメールを繰り返しご利用いただく時にも便利です。

※ 送料は、お届けした資料に同封されている支払い方法に従いお支払いください。

※上記1、2、の請求方法についてのお問い合わせ先 **テレメールカスタマーセンター TEL: 050-8601-0102** (9:30～18:00)

3：大学情報センターの「モバっちょ」で請求する場合(携帯電話及びホームページ) [大学案内、入学者選抜要項、各学部学生募集要項(美術学部帰国子女入試を除く)]

携帯電話から
QRコード対応の携帯電話なら、QRコード(2次元バーコード)を読み取ってアクセスできます。
「モバっちょ」では、資料請求料金を携帯電話の通話料金と一緒に支払いいただけますので、郵便局等に払い込みに行く必要がなく、最も安く請求できます。資料請求代金以外に、別途支払い手数料等は必要ありません。(パケット通信料を除く)
携帯電話の機種、携帯電話会社との契約状況によってご利用できない場合がございます。



ホームページ(クレジットカード決済のみとなりますが同じ料金で請求できます)
【URL】 <http://djcm-mb.jp/geidai2/>
このアドレスから直接資料の請求申し込みができます。



※上記3の請求方法についてのお問い合わせ先 **大学情報センター株式会社 モバっちょカスタマーセンター TEL: 050-3540-5005** (10:00～18:00)

4：郵便局で請求する場合 [大学案内、入学者選抜要項、各学部学生募集要項(美術学部帰国子女入試を除く)] (10月より案内開始)

最寄りの郵便局に設置されている「**国公立大学・短期大学および通信教育課程、大学校募集要項(願書) 請求申込書**」(郵便局用願書請求カタログ)に必要な事項を記入し、送料(美術学部:400円、音楽学部:600円)と払込手数料120円を添えて、最寄りの郵便局の窓口で申し込んでください。受付から1週間程度で送付されます。なお、請求申込書は高等学校で入手できる場合もあります。

※上記4の請求方法についてのお問い合わせ先 **テレメールカスタマーセンター TEL: 050-8601-0102** (9:30～18:00)

5：本学へ直接郵送にて請求する場合

下表を参照し、請求資料名、請求者の氏名、住所、郵便番号を書き、郵便料金分の切手を貼った返信用封筒を同封して、担当係あてに請求して下さい。
請求先住所：〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

■ 学生支援課入学試験係 (tel: 050-5525-2075)	発行時期(配布開始)	出願期間	返信用封筒	重さ	郵便料金
入学者選抜要項	26年7月下旬		角型2号	90g	205円
大学案内	26年7月下旬		角型2号	170g	250円
大学入試センター試験受験案内	26年9月1日	26年9月29日～10月9日	(窓口配布のみ)		
■ 美術学部教務係 (tel: 050-5525-2122)					
美術学部学生募集要項	26年11月下旬	27年1月26日～2月4日	角型2号	290g	400円
美術学部学生募集要項(帰国子女) ※先端芸術表現科でのみ実施	26年11月下旬	26年12月26日～27年1月7日	角型2号	280g	400円
大学院美術研究科(修士課程) 学生募集要項	26年7月下旬	第1期 26年8月18日～22日 [※1：出願資格審査 8月1日まで] 第2期 26年11月27日～12月3日 [※1：出願資格審査 10月17日まで]	角型2号	300g	400円
大学院美術研究科(博士後期課程) 学生募集要項	26年7月下旬	26年11月27日～12月3日 [※1：出願資格審査 10月17日まで]	角型2号	280g	400円
大学院美術研究科 研究生募集要項	26年10月下旬	27年2月上旬(昨年2月7日～)	長型3号	30g	92円
■ 音楽学部教務係 (tel: 050-5525-2309)					
音楽学部学生募集要項(含別科)	26年12月上旬	27年1月26日～2月4日	角型1号	520g	600円
大学院音楽研究科(修士課程) 学生募集要項	26年7月中旬	作曲以外 26年8月8日～14日 作曲のみ平成27年1月5日～9日 [※1：出願資格審査 7月30日まで]	角型2号	370g	400円
大学院音楽研究科(修士課程) 学生募集要項(外国人留学生)	26年11月下旬	27年1月上旬(昨年1月6日～) [※1：出願資格審査(昨年12月2日まで)]	角型2号	420g	400円
大学院音楽研究科(博士後期課程) 学生募集要項	26年7月中旬	27年1月5日～9日 [※1：出願資格審査 26年11月14日まで]	角型2号	260g	400円
大学院音楽研究科 研究生募集要項	26年11月下旬	27年1月上旬(昨年1月6日～)	長型3号	40g	92円
■ 大学院映像研究科事務室 (tel: 050-5525-2671)					
大学院映像研究科(修士課程) 学生募集要項	26年8月下旬	①映画専攻(監督、脚本領域)、メディア映像専攻、 アニメーション専攻 26年12月1日～5日 ②映画専攻(プロデュース、撮影・照明、美術、サウンド デザイン、編集領域) 27年1月14日～21日 [※1：出願資格審査 11月1日まで]	角型2号	290g	400円
大学院映像研究科(博士後期課程) 学生募集要項	26年8月下旬	26年12月1日～5日 [※1：出願資格審査 10月31日まで]	角型2号	260g	400円
大学院映像研究科 研究生募集要項	26年11月中旬	27年2月下旬(昨年2月26日～) [※1：出願資格審査 12月12日まで]	長型3号	40g	92円

6：本学に直接来学して請求する場合

上記当該学部等正門の守衛所又は上記の当該担当係で配布しています。

※ 電話による問合せの場合は、原則として志願者本人が行ってください。(月曜～金曜日9:00～12:30、13:30～17:00 土曜・日曜・祝祭日は除く。)

注意事項

●大学入試センター試験受験案内は、最寄りの国公立大学又は、大学入試センター試験を課す近隣私立大学へ行き請求してください。原則として本学からの郵送は行いません。

●出願期間を考慮し、十分余裕をもって請求してください。

●学部入試では、各学科(専攻)ごとに、大学入試センター試験において受験を要する教科・科目を指定しているので間違いないよう注意してください。

●大学院出願の場合、事前に出願資格審査が必要な場合もあります。左表※1は、大学を卒業した者と同等以上のものが「修士課程」の出願を希望する際に受ける「出願資格審査」、または修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上のものが「博士後期課程」の出願を希望する際に受ける「出願資格審査」の申請締切日。

●学部・修士・博士の学生募集要項を請求した場合、『大学案内』を同封します。(大学案内付の値段です。)

●複数部数を請求する場合は左記封筒に重さ乗じた分の切手料金を貼ってください。

●郵便で請求する場合は、発行予定時期の1カ月前から請求してください。発行次第返送します。

●部数1部で速達の場合、重さ250gを超えるものは380円、それ以外(250gまで)は280円を加算してください。

●日本国外からの請求の場合は、左表当該g数の料金相当の国際返信用切手券を同封の上請求してください。

●返信用封筒は、折ってもかまいませんので、定型封筒に入れ請求してください。

●左表中、(昨年〇月〇日～)となっているのは、昨年度実施の日程です。今年度の日程は、今のところ決まっておりません。数日後の変更及び受付期間が短いもの等がありますので目安として早めに請求してください。



2013年度卒業修了作品展



藝祭2013

東京藝術大学 大学案内 2015

編集・発行：

東京藝術大学 学生支援課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京藝術大学

Tokyo University of the Arts

美術学部	絵画科
	日本画専攻
	油画専攻
	彫刻科
	工芸科
	デザイン科
	建築科
	先端芸術表現科
	芸術学科

音楽学部	作曲科
	声楽科
	器楽科
	指揮科
	邦楽科
	楽理科
	音楽環境創造科
	大学別科
	附属音楽高等学校

大学院 美術研究科	修士課程	絵画専攻
		彫刻専攻
		工芸専攻
		デザイン専攻
		建築専攻
		先端芸術表現専攻
		芸術学専攻
		文化財保存学専攻
	博士後期課程	美術専攻
		文化財保存学専攻

大学院 音楽研究科	修士課程	作曲専攻
		声楽専攻
		器楽専攻
		指揮専攻
		邦楽専攻
		音楽文化学専攻
	博士後期課程	音楽専攻

大学院 映像研究科	修士課程	映画専攻
		メディア映像専攻
		アニメーション専攻
	博士後期課程	映像メディア学専攻

- 上野校地 〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
電話 050-5525-2075
- 取手校地 〒302-0001 茨城県取手市小文間5000
電話 050-5525-2543
- 横浜校地 〒231-0005 神奈川県横浜市中区本町4-44
電話 050-5525-2673
- 千住校地 〒120-0034 東京都足立区千住1-25-1
電話 050-5525-2727